

2011 年度修士論文

都市住民による「遊び仕事」としての「農」は、
都市農地の「利用」を担えるか。
～農業体験農園マイファームを事例として～

Is it possible for city dwellers to make use of farmlands in a city
by farming them as minor subsistence?
～Case study of “MY FARM”～

横山一樹

Yokoyama, Kazuki

東京大学大学院新領域創成科学研究科

社会文化環境学専攻

目次

| | |
|------------------------------------|----|
| 1. 問題関心と先行研究 | 4 |
| 1.1. 都市住民の日常に、自然とのかかわりはあるか | 4 |
| 1.2. 土地の所有と利用の関係性 | 5 |
| 1.3. 都市農地をめぐる歴史的、政策的背景 | 7 |
| 1.4. 都市農地に地域住民がかかわる傾向の増加 | 10 |
| 1.5. 本研究の課題 | 12 |
| 1.6. 本研究の目的 | 13 |
| 2. 農業体験農園マイファーム | 16 |
| 2.1. マイファームの仕組み | 16 |
| 2.2. マイファームの理念 | 17 |
| 2.3. その他の事業 | 18 |
| 2.4. これまでの農園と何が異なるか | 19 |
| 3. 調査方法 | 21 |
| 3.1. 調査対象地 | 21 |
| 3.2. 聞き取り | 22 |
| 3.3. 参与観察 | 23 |
| 3.4. フィールド調査 | 24 |
| 4. 農家（土地オーナー）の事情と思い | 25 |
| 4.1. それでも守らなければならない農地 | 25 |
| 4.2. 農家でも、指導はできない | 26 |
| 4.3. オーナーの自己実現と、「遊び仕事」としての農 | 27 |
| 4.4. 農地をめぐる三者の信頼構築の場 | 28 |
| 5. 人と農地、人と人をつなぐ管理人 | 30 |
| 5.1. 管理人の意識と役割 | 30 |
| 5.2. 効率の農と、遊びの農の狭間を揺れ動く | 32 |
| 5.3. 求心力は、密なコミュニケーションと対応の誠実さ | 33 |

| | |
|------------------------------------------|----|
| 5.4. 地域と農園の触媒としての管理人..... | 34 |
| 6. 参与観察による農の実践..... | 37 |
| 6.1. 除草、耕起から作付けまで | 37 |
| 6.2. 手入れ..... | 39 |
| 6.3. 収穫 | 40 |
| 6.4. 休閑期に何を求心力にできるか | 41 |
| 7. 都市住民による自由な農..... | 43 |
| 7.1. 続かなかった過去の経験..... | 43 |
| 7.2. 農へのかかわりを強めていった背景 | 44 |
| 7.3. 意図と個性が映し出される区画利用 | 45 |
| 7.4. 共同区画や収穫祭が持つ意味..... | 46 |
| 7.5. 区画を超えた管理の意識..... | 48 |
| 8. 考察 | 49 |
| 8.1. 「都市農地」の保全の在り方をどう考えるか..... | 49 |
| 8.2. 「遊び仕事」「遊び」としての農の成立条件と、自己強化の特性 | 51 |
| 8.3. 都市農地の「所有」と「利用」を組み替えるという視座..... | 53 |
| 9. まとめ..... | 57 |
| <参考文献> | 59 |

1. 問題関心と先行研究

1.1. 都市住民の日常に、自然とのかかわりはあるか

近年の環境倫理学の分野においては、人と自然を二項対立的に捉えるのではなく、その関係性を重視し、人と自然とのかかわり合いの中で問題を動的に捉えていくことの重要性が説かれている。(鬼頭・福永編,2009) 農村地域に暮らす人々や、開発途上国、先進国の先住民を対象に、彼らと自然とのかかわりに主眼を置いた研究が数多くなされている。¹それでは、比較的对象とされにくい、都市に暮らす生活者は、日常の中で、そもそも自然とかわる機会を確保できているだろうか。一言で自然といっても、人の手が入っていない「原生自然 (wilderness)」だけを指すのではなく、人の手を加えることで管理されている「二次的自然」もそれに含まれる。二次的自然の代表的なものとして、「里山」があり、都市近郊に暮らす生活者にとっての「身近な自然」として、里山は近年注目を集めている。(武内ほか編,2001) 確かに、里山は全国に広く分布し、都市近郊に生活する人々にとって、最も利用しやすい自然の一つかもしれない。しかし、都市の内部に多くの里山が存在するわけではないため、都市住民が里山へ訪れるためには、車や電車を利用して、それなりの距離を移動してアクセスすることになる。したがって、平日ないしは休日に、ふらっと手ぶらで立ち寄れるほどに、都市住民の日常に根付き、寄り添った自然とまでは言い難いように思われる。高度経済成長期において、急速に都市化が進み、都市部での人口の過密化が進んできたわが国においても、少子高齢化を背景に、今後は、人口が減少に転じ、都市部が空洞化することが懸念され、「縮小する都市」に戦略を以って臨む必要に迫られると大野(2008)は指摘する。こうしたこれからの社会情勢をも踏まえた上で、都市住民が、日常の生活圏においていかに自然にかかわる生活を実現しうるかを検討することは、人と自然とのかかわりを論じていく学問領域においては、極めて重要なテーマではないだろうか。西欧の環境倫理学は、人と自然を切り離されたものとして相対化し、「人間中心主義」あるいは「人間非中心主義」といった二項対立の図式で議論を展開してきた。その二項対立の図式で環境問題を捉えることそのものが限界を迎えており、それゆえ、人と自然との関係性の中で環境問題を捉え直す枠組みが今必要とされている。(鬼頭・福永編,2009) この、人と自然との関係性、全体性に基づく理論の枠組みを活用することは、当然ながら、その現場において、人と自然のかかわりが存在する、あるいは存在していたことを前提とする。先述したように、農村地域や開発途上国をフィールドとした環境倫理学や環境社会学の研究においては、その現場で営まれてきた、伝統的、文化的な人と自然とのかかわりに注目して議論を展開するものも多い。それらの研究は、これまで政策や合意形成の場で無視さ

¹ 例えば、ニホンザルの獣害と自然保護の関係について考察した丸山(2006)の研究や、ソロモン諸島アノケロ村をフィールドにした宮内(2011)の研究等がある。

れ、あるいは気づかれることのなかった視座を議論の舞台に上げる役割を担っている。一方、この、人と自然との関係性、全体性に基づく議論に参加するためには、その主体自身が、自然とのかかわりを生活の中で実現していることが求められるであろう。自然から切り離された生活に身を置きながら、人と自然のかかわりについて、議論の対象とする現場に思いを馳せることは困難であるし、自身が重ね合わせる体験を持ち合わせなければ、議論は想像の域を超えない。その意味で、人と自然との関係性から環境問題を検討し直すことの有効性を高め、その適応範囲をより広げるためには、研究者に限らず、議論の主体となる市民、特に人口の多くを占める都市部に住む住民が、自然とのかかわりを日常生活の中で持ちうる社会環境の在り方について、同時に検討していかなければならないであろう。私たち都市住民は、市場経済と密接に結びついた日常生活を送っているが、市場は、自然の持つ機能面を最大限に獲得することにのみ注力するため、そこにあるのは人と自然の「切り身」の関係性であり、「社会的・経済的リンク」はあっても、「文化的・宗教的リンク」は存在しにくい。鬼頭（1996）は、この「社会的・経済的リンク」と、「文化的・宗教的リンク」の2つのリンクを、過去に存在した理念上のものとして、静的に捉えるのではなく、2つのリンクの全体性、統合性を再構築するような動的な在り方を模索することが必要であるとしている。したがって、都市住民の生活において、自然とのかかわりが「切り身」の状態に陥っているとすれば、それを「生身」の豊かな関係性へと変えていく具体的な方策も求められよう。環境には、「自然的環境」、「社会的環境」、そして「精神的環境」といった、様々な位相が存在する。鬼頭（2009）は、それらを個別に考えるのではなく、全体性の中で捉える必要性を唱えている。私たち都市住民は、日常の中で自然にアクセスすることによって、はじめて、この「自然的環境」、「社会的環境」、「精神的環境」を相互に関連させ、それらの全体性を捉える視座で環境について考える土壌に立つと言えるであろうし、市場を介した「切り身」の自然との関係性ではなく、身体性や精神性を伴う「生身」の関係を、動的に、未来志向で獲得しうるであろう。この「日常の中の自然」になり得るものとして、本稿では、都市内部に遍在する農地に注目する。都市農地について議論を展開する前に、まずはその前提を成す、日本の土地における所有と利用の関係性について概観したい。

1.2. 土地の所有と利用の関係性

土地法研究者の大沢（1985）は、調査の上で、日本では土地への執着心が高く、土地所有感覚が強いことを確認したという。この土地への執着の要因を、日本の土地制度の歴史的背景を追う中で説明している。

戦後の農地改革により、地主と小作人の関係が解体され、国から新たに土地を割り当てられた農家は、土地の所有者になると同時に、直接土地を利用する自作農となった。そし

て、昭和中期には、大都市や近郊へ異常に人口が集中し、40年代には、高度経済成長で地価が急激に高騰していった。土地を保持していれば、いずれ金持ちになれるという「土地神話」の中、企業も個人も、銀行から借りた金で投機的に土地を買い進め、これにより、土地が持つ本来的な意味や価値が失われていった。また、同じく戦後に、旧「家族」制度が崩壊したことで、土地に対する考え方も変わってしまった。それまでは、先祖代々受け継がれてきた土地を、手放さず、守り受け継いでいくという社会通念があったが、「均分相続制」によって、財産が妻や子供に均等に相続されるようになり、土地も分割されていった。農地として利用されていた土地も、分割されてしまうと、用途に適さなくなり、農業が営まれなくなるケースが相次いだ。また、相続によって土地が割り当てられることで、土地は自分の所有物であるという認識が強まり、土地は商品化されて取引の対象となっていったのである。こうした歴史的、政策的背景により「近代的土地所有権」が発生した。

その上で、大沢は、土地に対しての所有権と利用権とを峻別して、これまでの土地所有一辺倒から土地利用への発想転換をすることや、底地権の国公有化への道を歩むという道を探る必要性を唱えている。新しい借地方法の工夫をすることも重要であるとしている。土地は、一方では私有財産制度の体系のなかに構成された私的な財産としての性格を持つが、他方ではその公共的性格から共有財産であることを認めて土地本来の利用の在り方に従うべきだという。土地所有制の問題は、土地の持つこの二面性を、どう調整するかということになると指摘する。(大沢,1985) この、土地の所有と利用をどう考えるか、という問題について、どのような議論が展開されているかを見ていきたい。

カール・ポランニー(1975)は、土地の脱市場化を主張した。土地は自然の別名であり、人間はそれを生産する術は持たないため、労働や貨幣と同じように、土地が本来は商品でないことは明らかであり、これを市場から取り除くことで、人間の生活を回復するべきであるという。

このポランニーの議論に同調する立場で、平松(2005)は、コモンズ論の立場から、「総有」論を手掛かりとして、地域社会の永続性に資する土地管理の在り方を提案している。「総有」とは、ある物の所有権が団体の構成員全員に帰属し、メンバー個人に持ち分があるが、分割請求や持ち分の譲渡はできず、脱退時、転出時の払い戻しもできないような所有の在り方のことをいう。平松は、当該地域主体が、総有的に土地を所有し続ける土地制度を提案し、それにふさわしい法律の制定が必要だという。このとき、地域主体は、土地の利用方法を定める業務を負い、土地を処分することも、担保することもできないが、利用・収益権を持つ。こうしたコモンズの制度を実現することで、土地の修復や再生といった、経費のかかる事業において、所有者個人に負担をかけるのではなく、地域全体の問題として捉えることができ、その実現性が高くなる。コモンズの制度は、従来の所有に引っ張られる利用の在り方と比べて、利用そのものの価値を尊重する制度であるとし、一方、もし土地の地域所有が実現できない場合には、「地域利用」を目指すことで、「共用」は可能になるという。(平松,2005)

この「総有」は、構成員の団体としての一体性が強く、慣習法としての「入会権」に類似した概念と言える。しかし、五十嵐（2004）は、この点について、過去の入会権をそのまま都市に導入するということではなく、自治体と市民が一体となって知恵を生かし、共同して地域づくりを行うためのシステムを作る上で総有概念が必要になると説明している。慣習法による入会権とは異なる現代的な形で、土地の総有化を行おうとすれば、それは平松が指摘するように、新たな法律の制定が必要になるであろう。

総有に対する批判として、嶋津（1992）は、共同体的所有によって発生する非効率さについて言及する。土地などの財産の処分に当たって、構成メンバーの間に合意が成立するまでは、どんな処分も行うことができない非効率さのことを「共同体的所有の悲劇」と呼んでいる。嶋津は、自由と効率の点において、市場の交換ネットワークを積極的に評価しており、共同体的所有に対して懐疑的で、私的所有に意義を認めている。しかし、私的所有が、本当に自由で効率が良いかについては、一考の余地がありそうだ。所有者の家庭的事情ないしは経済的事情などにより、土地の運用に関する選択肢がほとんど与えられない状況も想定される。その場合には、むしろ総有的な土地利用の在り方の方が、幅広い利用、効率的、効果的な利用が可能になることも考えられるため、一概に私的所有による利用が自由と効率をもたらすとはいえないかもしれない。いずれにしても、近代化とともに私有化が進められてきた日本の土地においては、その運用にあたり問題を抱えてきていることが明るみに出てきた。様々な主張はあるにしろ、土地の所有と利用の関係性をどう組み替えるかが、議論の焦点となりそうである。次に、本稿の舞台として扱う都市農地について見ていきたい。

1.3. 都市農地をめぐる歴史的、政策的背景

都市農家は、この半世紀の間の度重なる制度の変容に翻弄されてきたといえる。後藤（2000）は、法制度の推移を追いつつ、都市農地が抱える構造的な課題について論じている。

1968年の新都市計画法に基づいて設定された、市街化区域内に含まれる農地は、道路や下水道などのインフラ整備のため、非農業的土地利用に転換すべきものとされた。同法が、農地の存在が良好な都市環境形成に矛盾するものとして、都市農地の存在を否定していたことに対し、1974年の生産緑地法は、都市農地の中に公害・災害防止の機能、将来の公共施設用適地としての価値を認め、それらを生産緑地として都市計画の中に位置づけた。しかし、面積要件が厳しい等の理由で、生産緑地の指定は進まなかった。そこで、1991年の生産緑地法の改正では、都市農地の役割を緑地機能として積極的に評価し、農地を適切に保全することによって都市環境を維持することを初めて明確にした。ところが、改正後も、生産緑地法は、都市農地の持つ緑の機能や保留地機能は評価しつつも、それらを担保する

ための大前提である、都市農業の生産機能そのものを評価したわけではなかった。改正生産緑地法に基づき、市街化区域内農地が生産緑地と宅地化農地に区分された 1992 年以降、相続の際に、生産緑地の多くが農家によって売却されてしまっている。これはなぜだろうか。都市農家の高齢化や、後継ぎ不足の問題に加え、農業による収益性の低さから、宅地化農地の区分で貸家・アパート・マンションを使った不動産経営によって生計を維持せざるを得ないのが都市農家の現状である。しかし、不動産経営に使う宅地化緑地では、生産緑地の 300 倍以上もの固定資産税（1998 年時点で、10a 当たり生産緑地で 3,080 円、宅地化緑地で約 100 万円）の負担が発生するだけでなく、相続税納税猶予制度も適用されない。それにより、相続時に、高額な相続税を支払う資金をつくるため、相対的に収益性の低い農地を売却してしまうというジレンマ的構図が存在するのである。

中原・星野（2006）は、神戸市西区を対象地に、都市農家に対するアンケート調査を通じて、農家の生の声に基づいた分析を行っている。兵庫六甲組合員農家 200 戸（有効回答数 96 戸）への調査によると、まず農家は、所有する土地資産の管理について、96.9%が「関心がある」と回答しており、有益な運用方法さえあれば、積極的に取り組むだろうと考えられる。しかし、意外なことに、農地を生産緑地へ追加指定したいかについては、63.8%もの農家が、「宅地化農地のままで良い」とした。生産緑地への追加指定は、税の負担軽減がなされ、農家にとってメリットが大きいと考えられるが、なぜこれほどの農家が望まないのであろうか。仮に、生産緑地に指定し税制上の優遇を受けても、農作物の卸価格の安さから農業は赤字経営に陥り、規模を拡大してまでやる気にならないという。収益性の高いハウス栽培も、膨大な設備投資を必要とし、大きなリスクを伴う上、年齢・体力的な制約で、現実的な選択肢に入らない。家から遠い農地や、土地条件の悪い農地では、貸し農園にしたり、しかたなく営農したりしている。好立地にある農地では、借地・貸し店舗・賃貸住宅などの不動産経営を行っている。好立地にある農地を手放すことはないが、立地の良し悪しにかかわらず、宅地化農地は、チャンスがあれば売る意向が強く、それまでは、暫定的に仕方なく農地として保持して営農している。中原・星野（2006）は、「農業経営では、営農意欲の向上をもたらすようなメリットが少なく、デメリット的な要素が多い。一方、不動産経営では農業経営と比べ、メリットが多く、農家にとって魅力的であると思われる。それらが、営農意欲欠如の根本的な要因となっていると言えよう」²と分析している。この調査からは、都市農地において、農家が生業としての農業を営むことへのインセンティブが欠如し、農家の視点での合理的な視点として、それが取るべき選択として成立しにくくなっていることが露見している。

一方、これまでの都市農地、特に市街化区域内における農地をめぐる研究においては、菊地（1999）が「その多くは農業側からの視点を中心であり、非農家である地域住民が、市街化区域農家の土地利用に対して、どのように評価しているかについては、明らかにさ

² 中原嘉嗣・星野 敏、2006「都市農地の現状と課題について 神戸市西区を事例として」『農村計画学会誌』25、441 ページより引用。

れてはいない」³と問題提起している。今後、市街化区域の農地を存続できるかについては、農家の事情に基づく研究や、都市計画の立場からの研究だけでは不十分で、周囲の都市住民がその農家の土地利用に対してどのような評価を下すかによって左右されるというのだ。例えば、千葉県松戸市の地域住民に対するアンケート調査では、年齢や職業による極端なバラツキがなく、概ね市街化区域内農地の持つ機能を高く評価しているとの結果が得られたという。「場所提供機能」「心理機能」「環境機能」の3つの機能を評価してもらったところ、特に、「場所提供機能」への評価が高く、その背景には、松戸市の公園やオープンスペースの面積が少ないことが原因であると考えられている。自由意見としては、「市街化された地域にも緑地空間は必要であり、そうした空間の代わりとして農地は重要な役割をもっているとする意見が数多くみられた」⁴という。また、「積極的に開発推進」の項目に対して「開発抑制」がおおよそ2倍の評価を受けるなど、「地域住民はもはや地域の開発を望んでいないことを示している」⁵。

菊地の調査が興味深いのは、都市住民の心的変化が示唆されている点にある。もともと、1991年の生産緑地法の改正は、バブル経済による都市部の地価の異常な高騰により、都市に住居を持ってない都市住民が、形だけで実態をなしていない農地を活用すべきと考え、農地に宅地並みの課税を課し、宅地供給を促すべきだと主張してきたことに後押しされる形で成立した背景がある。その状況を鑑みると、都市における農地の機能について、多くの都市住民が見直しつつあるという松戸市の事例は、都市農地の新たな利用の枠組みを期待させるものとして捉えられる。

後藤（2000）もまた、既述の都市農地が抱える構造的な課題に対し、「農地と非農地の地価格差（農業が不利であることの反映である）が大きい都市地域において、私的所有の下にある農地を保全していくことは困難が大きい」⁶と認識した上で、「地域住民が周りの農地・農業の価値を具体的に認識するための方法論の開発が必要」⁷と指摘する。

並木（2008）は、都市農地や空き地に関して、農家がもはや私的所有にもとづいた土地利用のインセンティブを得られずに管理がなされない課題に対して、地域における土地利用の新たな需要にもとづいた、新たな利用主体を検討することが求められるとしている。しかしながら、農作物の栽培の特徴として、土地と利用者の結びつきが強いため、「公」的な、誰もが自由に入出入りできる公開されたオープンスペース（つまりはコモンズ的な空間）として利用することは困難である。その意味で、利用者の制限は必要となる。また、財政難などで、行政が直接緑地を保全・整備する能力を失いつつあるため、地域住民が共同的

³ 菊地香, 1999「首都圏および地方中核都市住民による市街化区域内農地利用の評価に関する研究—松戸市小金地区と新潟市鳥屋野地区のアンケート調査結果を中心に—」『農林業問題研究』44ページより引用。

⁴ 同上。46ページより引用。

⁵ 同上。47ページより引用。

⁶ 後藤光蔵, 2000「都市農地の保全」『武蔵大学論集』47(2), 58ページより引用。

⁷ 同上。54ページより引用。

な主体として土地を管理・利用することが必要となり、地域住民による「農」的な管理・利用の在り方を検討することが有意義であると提案している。それでは、都市農地と地域住民とのかかわりについては、どのような動きが見られるであろうか。

1.4. 都市農地に地域住民がかかわる傾向の増加

都市住民と農地との接点として、「市民農園」が存在する。市民農園は、18 世紀後半にイギリスで生まれ、ドイツで形態と概念が整えられ、フランスによって国際組織化が進められたとされている。いずれの国においても、市民農園は、生活支援のために貸し与えられた自給菜園、あるいは自給農園としてスタートしている。日本で一番よく知られているのは、ドイツの市民農園（クラインガルテン）で、1 区画が 300 m²ほどもあり、小屋と野菜畑、花壇、芝生と果樹で構成されている。（佐古井,2007）日本に最初に市民農園が開設されたのは大正時代といわれるが、1952 年に農地法が制定され、市民農園は農地制度的に存在ができなくなった。しかし、1975 年には農水省が市民農園を「レクリエーション農業」として認めることとなり、1989 年には「特定農地貸付法」、1990 年には「市民農園整備促進法」が出来て、市民農園は普及段階に入った。しかし、日本の市民農園は、ヨーロッパに比べて 1 区画が 10 分の 1 程と狭く、利用期間も 1~3 年と短い。それにもかかわらず、市民農園の利用者は急増しているという。農林水産省が開設を認めた時期に農園数が 400 程度だったのに対し、近年では、平成 5 年度末に 1,039 個、平成 15 年度末には 2,904 個、平成 21 年度末には 3,596 個にまで増加してきている。そのうち約 9 割は、地方公共団体や農協が開設しているもので、特定農地貸付法による開設が全体の 8 割強を占めている。開設主体の残り 1 割相当は、農家や企業、NPO によるものであるが、それらも大きく数を増やしてきている。（農林水産省,2010）しかし、行政が認知していない、法制度に依拠しない形態による、「市民農園」の概念ではくくれない営みも生まれてきていると横張ら（2006）は指摘している。

従来、都市近郊における農作物栽培は、農家による生業としての農業と、市民農園における園芸かに二分されて考えられ、この二項対立の図式のもと、都市における農作物栽培に対する政策的な枠組みでの支援が行われてきた。しかし、横張ら（2006）によれば、近年、こうした二元論のもとでは実態を正確に位置づけられない農作物栽培が認められるという。特徴としては、非農家の都市住民が活動主体であり、市民農園として利用されていない場所を利用し、耕運から収穫までの一連の農作業に都市住民が関与しているもので、この営みを「農的活動」と称している。農家による農業生産においては、作業主体は農家であり、市民農園においては原則として個人が作業主体となるが、農的活動では、都市住民と農家が共同で作業を行い、農家が都市住民を指導するなど、都市住民と農家が協力して農作物栽培を行う形態が見られる。都市住民による農的活動は、農家による農業と、市

民農園における作物栽培との中間的な性格を持つ存在である一方で、既述の通り都市住民と農家の共同作業が見られる他、集団での農作物栽培を行っている点などで、どちらにも認められない特徴を有している。農的活動を行う都市住民は、「農業生産に携わることで、地域の農業や地域社会へ貢献したい」や「もっと上手に農作物を栽培したい」といった目的を持つことが確認されたという。⁸そのために、一般的な市民農園で、個別に独学で、手探りに作業をするのではなく、農家との共同での農業生産を行う選択をしたのであろうか。

また、市民農園においても、従来の在り方とは異なり、農家と都市住民との関係性の中で農作物栽培が行われる「体験型市民農園」という形態が近年活発化してきている。体験型市民農園もまた、農家が指導者として利用者に栽培指導などを行う点が、農的活動と共通しており（あるいは、体験型市民農園が農的活動に内包されるものと考えられる）、利用料を収入として得る方式で、農園利用方式と呼ばれる。この農園利用方式とは、農家が農業経営活動の一環として、利用者に複数段階の農作業の指導を行う方式の市民農園で、農業者と利用者の間で利用契約を結び、利用者側に小作権は発生しない。この方式は、あくまで農家の経営活動の一つとみなされるため、農地法上の問題も生じず、特に法的な規制、地域的な制約もない。相続税・贈与税猶予制度の適用対象ともなりえる。（大江,2009）

体験型市民農園が生まれた経緯については、白石（2001）が次のようにまとめている。1970～80年代に普及し始めた市民農園は、生産緑地制度が導入されたことで転機を迎え、農家は、農地を宅地化するか、生産緑地の指定を受け30年間の営農を継続するかを選択を迫られた。その結果、多くの農家は宅地化農地を選択したことで、農地に宅地並み課税を受けることになり、その高負担で農地を維持できなくなり、市民農園が廃園になる事態が頻発した。他方、生産緑地に指定されると、農地の貸借は営農活動とは認められないため、これまでの農地貸借による市民農園の形態はとれなくなる。こうした状況を背景として、新たな市民農園の在り方が模索され、農園利用方式が誕生したという。

阪口・大江（2003）は、練馬区における体験型農園経営者への調査から、従来の農業生産販売の場合との収益性についての比較検討を行っている。調査対象のA農家では、1区画30㎡で体験型農園120区画を有しており、練馬区の年間標準利用料29,000円でその収益性を開設前のキャベツ栽培と比べたところ、売上額と所得率はあまり変化しないものの、土地生産性で1.2倍、労働生産性では1.6倍と大きく上昇しており、一人当たりの所得も1.6倍となっているという。これは、市民農園では利用者が収穫物を持ち帰るため、農業者による収穫作業の手間が不要となることに起因する。このことから大江（2009）は、施設投資を控えれば、農園利用方式に則った体験型市民農園は「都市農業における一つの経営部門としての成立の可能性は小さくないことが分かる」⁹という。さらに「退職後の団塊世

⁸ 並木 亮・横張 真・星 勉・渡辺 貴史・雨宮 護、2006「市街化区域内農地における都市住民による農作物栽培の実態解明」『農村計画学会誌』25、272ページを参照。

⁹ 大江靖雄、2009「体験型市民農園にみる都市農地利用と市民参加 ー新しい農村地域資源管理に向けてー」『食と緑の科学』63、14

代や農的生活への市民的関心の高まりや農業人口の現象から、今後さらに都市農地の利用において市民参加が進展することが予想される」¹⁰とし、農地利用についての本格的な議論を開始する必要性を訴えている。

後藤（2000）は、農家が開設する農業体験農園（体験型市民農園）に注目し、「開設農家にとって経営の中の一つの部門として位置づけ可能な水準にある。これなど農業技術の知識やレクレーションの機会・場を「販売」しているのであり、従来の農産物を生産・販売するという農業の概念をこえる試みの一つであろう」¹¹と評価している。都市農地の存続のためには、農地の多面的機能を認知し、農業とは、農家が自分で農産物を生産・供給する仕事であるというこれまでの農業の概念を拡大し、都市らしい農業経営を作っていくことが、農業で生活できる条件を広げることに通じると提案している。

1.5. 本研究の課題

土地の私有化が進み、都市の農地においても、所有と利用の主体が同一であることを当然視して、これまで管理がなされてきた。しかし、1.2.で見てきたように、所有と利用が固定化した農地利用の在り方では、高齢化や後継ぎ不足、収益性の低下といった、現代的な問題に対処できなくなりつつあることが明るみに出てきている。農地の所有と利用を組み替える視点で、新たな農地管理の在り方を模索することが求められている。また、財政難で地方自治体による市民農園の新規開設、運営も難しくなっている中で、都市農家としては、それに頼らず、自ら積極的に選択する農業経営として、地域住民を利用主体とする農地管理の在り方を探っていく必要があるだろう。その意味で、行政や農協による従来型の市民農園だけでなく、農家が直接都市住民と結びついて、ノウハウを生かした栽培指導や作付け計画のもとに、共同して農作物栽培を行う事例が増えてきていることは、望ましいことであると考えられる。

しかし実際には、農家が自ら、農的活動や、農園利用方式に則った体験型市民農園の運営に乗り出すには、乗り越えるべきいくつかのハードルが存在する。まず、近隣地域に住む都市住民に対し、利用者をいかに募集するか、という課題がある。自治体の広報誌や掲示板を通じて案内できる場合にはまだ良いが、自前で地域の広告媒体を使おうとすれば費用がかかるし、年配の農家が慣れないインターネットを使って集客をすることも難しい場合が多いであろう。また、農家は、農作業のプロであるが、必ずしも素人に分かりやすく、体系立てて指導することに長けているとは限らない。農作業には、長年の経験で蓄積され

ページより引用。

¹⁰ 同上。17 ページより引用。

¹¹ 後藤光蔵, 2000 「都市農地の保全」『武蔵大学論集』47(2). 51 ページより引用。

ていく暗黙知的な要素も多いはずで、分かりやすい形式知として素人に伝えられることばかりではないだろう。また、農家がこれまで営んできた生業としての農業は、少品種・多量生産が基本となってきたが、「遊び仕事」「遊び」としての農は、効率性や生産性を鑑みる必要がないため、多品種・少量生産を特徴とする。(安室,2008) この違いを認識した上で指導を行うことも必要だ。また、利用者との契約や集金についても、初めてのことなので、それらの内容の整備も一から自分で行う必要がある。こうした問題は、今後、農的活動や体験型市民農園の開設を志す農家には、必ず付いてまわるものと思われるが、これらを指摘する研究にはまだ出合っていない。したがって、現状、農的活動や体験型市民農園を開設できているのは、上記の一連の課題を農家が自ら克服できる場合か、第三者が仲介者として介入し、都市住民と農家とをつないでいる場合のどちらかであろう。今後、行政や農協が開設主体となる従来型の市民農園ではなく、農的活動や、体験型市民農園を増やしていくためには、農家の自助努力に委ねるやり方だけでは不十分である。農家と都市住民を直接つなげる仲介者の機能が不可欠になってくると考えられる。

また、著者は、1.1.で述べたように、都市住民がいかにして日常の中で自然とのかかわりを持ちうるかに関心を抱いているが、それがどのような形でなされるかといえば、経済的側面の強い生業としてではなく、経済的側面を含みつつも、精神的・文化的側面の方がより強い「遊び仕事」「遊び」としてのかかわりになると考えている。農的活動・体験型市民農園では、農家と都市住民が直接結びつき、都市住民は農についての知識や技術を学びながら、農家の計画や指示に沿って農を営んでいる。それは、確かに生業として営まれているものではなく、遊びとしての側面が強い。しかし、「農家ありきの農」¹²であることを考えると、そこでの都市住民と自然とのかかわりは、ある意味で、農家というレイヤーを挟んだ形でのかかわりとなり、都市住民の自由な意思に基づいた「遊び仕事」「遊び」とはいえないかもしれない。

1.6. 本研究の目的

ここまで、日本の土地における所有と利用の関係性を踏まえた上で、農家が運用してきた都市農地に、都市住民がいかにかかわるようになってきたかについて追ってきた。行政や農協が提供する従来型の市民農園の他に、農家と都市住民が直接結びつき、協力して農作物栽培を行う農的活動や、体験型市民農園が存在することにも言及してきた。しかし、都市農地をめぐる、そうした新たな取り組みにおいては、多くのケースで、農家が主導して作付けの計画を立て、栽培指導し、都市住民はそれに従って農を営む形態をとっている。ここで著者が抱く関心は、都市住民の自由な意思に基づく「遊び仕事」または「遊び」と

¹² 著者による表現。農家が作付け計画を立て、それを実現するための指導を農園利用者に対して自ら行う農として定義する。

しての農は、果たして地権者である農家や周辺住民に許容されるか、ということである。従来型の市民農園では、指導者が不在のため、そのほとんどが農業素人である利用者が、自ら農について一から学んで実践する必要がある、運用は都市住民の独学に委ねられるきらいがあった。そして、適切な管理がなされずに、その利用の在り方を周辺住民から問題視される傾向もある。¹³一方、農的活動や体験型市民農園では、農家による指導、作付け計画を前提として都市住民が農地にかかわっており、そこでは、あくまで「農家ありきの農」が展開されている。農を営むためには、生業として行う場合でなくとも、それなりの専門知識が必要となり、都市住民が独学でそれを行うことには困難が伴う。その意味で、直接農家の指導を受け、その計画に沿って農が営まれる農的活動や体験型市民農園は都市住民にとって魅力的であろうし、実際、そうした点が都市住民の需要を捉えていることもアンケートやインタビュー調査で分かってきている。(横張ら,2006)しかし、前項で述べたように、「農家ありきの農」である限りは、都市住民が、自然との関係性の中で、自由な意思に基づいて営む「遊び仕事」「遊び」とはならないかもしれない。著者は、従来型の市民農園のような自由度が担保されつつ、農的活動、体験型市民農園のように指導も受けられる環境を以って、都市住民の日常における、自然での「遊び仕事」「遊び」としての農が成立すると考える。もちろん、そのような取り組みがこれまでに全く存在していない訳ではない。例えば、並木(2008)は、農的活動における都市住民と農家との関係を、次の3つに分類できるとしている。都市住民が農家から指導を受けて農作業を行う「農家指導型」、都市住民が主導して農作業を行う「都市住民主導型」、農家の農業経営に対して、都市住民がボランティアとしてかかわる「農家主導型」の3つである。2つ目の「都市住民主導型」の農的活動として、「えとの会」「グリーンエイトの会」を事例として挙げている。しかし、これらは農家に対する農業支援を活動主旨としており、都市住民が自ら作付け計画を行うものの、その承認を農家から受けることを必要としている。その意味では、「農家ありきの農」という枠から完全に独立したものではないかもしれない。農家にとっては、都市住民に農地を利用させるにあたり、「面識のない都市住民が自由に農地利用を行なうことによって、農地が荒らされることに対する不安」¹⁴「都市住民と農家との農作業のやり方が異なることに対して農家が不安」¹⁵といった懸念や不安を抱えている。これは、自らが所有し続ける土地である以上、当然の感情であろう。並木によると、「えとの会」や「グリーンエイトの会」は、こうした不安を、「都市住民と農家とのコミュニケーションを通じて都市住民が農家のやり方を学ぶことによって、農家の不安を解消していた。」¹⁶という。都市住民が、「遊び仕事」「遊び」としての農を、行政や農協に与えられた区画を利用する従来型の市民農園で営むのと、農家が所有する農地で営むのとでは、責任の度合いにおいて、全く意味が異

¹³ 関東農政局が、管内市民農園の337の市民農園開設主体を対象に、18年2月から3月にかけてアンケートを実施したところ、市民農園が抱える課題としては、「利用者の管理が不十分(マナーが悪い)」が最も多い結果となったという。

¹⁴ 並木 亮, 2008『都市住民を主体とした都市農地の利用価値と保全・活用に関する研究』博士論文(筑波大学), 54ページより引用。

¹⁵ 同上。54ページより引用。

¹⁶ 同上。54ページより引用。

なる。前者では、農家と都市住民は直接関与しておらず、行政が間に入って、もともと利用がなされていない土地などを都市住民に提供しているが、後者では、農家の土地の区画を直接借り受けるため、その利用の在り方の如何によっては、農家の生活に直結する問題となり得るからである。「農家ありきの農」ではない、都市住民が主導し、責任を負う中で「遊び仕事」「遊び」としての農は、果たして地権者である農家や周辺住民に許容されるだろうか。許容され、それによる持続的な農地管理がなされていくとすれば、農地にかかわるアクター間の関係性の中には、どのような要素が作用しているのだろうか。必要に応じて管理人からの指導を受けられる環境にありながら、耕起から作付け、収穫までを利用者が自らの自由意思と責任を以って行う点でユニークな、農業体験農園「マイファーム」を事例に考察する。

2. 農業体験農園マイファーム

2.1. マイファームの仕組み

農業体験農園マイファーム（以下、マイファームと呼ぶ）は、農業ベンチャー、株式会社マイファーム（代表：西辻一真氏、設立：2007年9月）（以下、マイファーム社と呼ぶ）によって運営される、農園利用方式に則った農業体験農園である。現在、関西・関東地域を中心に、約70農園が展開されている。マイファーム社は、農村地域だけでなく、都市部や、都市近郊においても耕作放棄地が増加している事態に注目した。高齢化や後継ぎ不足、営農するメリットの低さ等の問題を背景として、農家の離農、農地の荒廃が進んでいる一方、健康志向やレクリエーション志向により、都市住民の農への関心が高まってきている。マイファーム社は、都市部、都市近郊で同時に発生しているこの問題とニーズとをマッチングさせることで、事業展開を開始した。

マイファームの仕組みは次の通りである。まず、マイファーム社が土地オーナーから遊休地や耕作放棄地を借り受け、それを区画整備する。その上で、近隣地域住民を募集し、貸し農園として、各区画を割り当てている。区画の大きさは、9～20㎡で、利用者は利用料として月額3,000～6,000円程度をマイファーム社へ支払う。マイファーム社の主な機能は、利用者の募集・利用者への指導・利用者からの集金・農地の管理代行であり、農園の利用者数に応じたロイヤリティが農地オーナーへと支払われる。農園の開設に当たってかかる区画整備などの費用は、オーナーが負担する¹⁷が、これについては、マイファーム社による開園後の収支シミュレーションにより、十分に元手が回収できることの確認がなされた上で合意に至るものと思われる。マイファームとして開園できる農地の原則的な条件としては、20万人都市に存在し、利用者が十分に集められる環境下にあること、面積が1,000㎡以上あること、土壌汚染がないこと、体験農園として開設することに行政上の問題がないことなどが挙げられている。また、マイファームでは、農薬を使用しない自然農法や有機農法を採用している。¹⁸

¹⁷ マイファームの公式ホームページ（<http://www.myfarm.co.jp/>）によると、開園時には、工事費等の初期費用が50～150万円ほどかかる。2012年1月現在。

¹⁸ 基礎情報については、マイファームの公式ホームページ（<http://www.myfarm.co.jp/>）より参照。2012年1月現在。



図1 「マイファームの農園分布」¹⁹

2008年に京都で第1号農園を開園し、その後も関西を中心に開園していったが、最近では関東でも農園数を増やしている。

2.2. マイファームの理念

代表・西辻氏は、「高校生の頃、学校に通う電車の車窓から見える田畑の風景が気になって仕方ありませんでした。農地なのに耕されていない場所が目について。何で耕されていないんだろうって」²⁰と過去に抱いた問題意識を振り返っており、これが耕作放棄地を活用する事業を展開するきっかけとなったようである。西辻氏の思いに、共同設立者である岩崎氏の、「子供に安全で美味しい野菜を食べさせたいと思ったし、そう思っている同世代の親が多い」²¹という思いが重なり、耕作放棄地を都市住民が利用する形態での体験農園事業がスタートした。

社の理念としては、自分で生産して、自分で消費する「自産自消」を推進することと、日本の耕作放棄地問題を解消することの2点を掲げている。ただし、耕作放棄地の問題に関しては、どのような状況になれば、それが解消されたといえるかの判断が難しい。農園として運営されていても、空き区画が多ければ、管理されている農地とはいえないし、農薬を使用しない自然農法や有機農法を採用しているため、利用がなされていても、雑草の種が飛散して、近隣の農地や住宅に影響を与えること等も起こり得る。しかし、本論文で

¹⁹ マイファームの公式ホームページ（<http://www.myfarm.co.jp/>）より掲載。2012年1月現在。

²⁰ 大和田順子, 2011「自然資源を活かしたビジネスの新機軸」『アグリ・コミュニティビジネス—農山村力×交流力でつむぐ幸せな社会』26ページより引用。

²¹ 同上。27ページより引用。

は、都市住民による遊び仕事としての農に主眼を置くため、耕作放棄地問題の是非をめぐる議論には立ち入らない。

また、マイファーム社は、日本の農業の問題は、都市部の農地を改善するだけで解決する訳ではないとし、現在展開している都市部における体験農園事業にとどまらず、段階的に、中山間地や地方での新規就農者の育成事業なども開始している。都市部での体験農園事業は、都市住民の「自産自消」を促すだけでなく、彼らが将来、農の知識を持った賢い消費者として、日本の農業を支える役割を担うことを見込んでいるようである。

2.3. その他の事業

前項末で触れたが、マイファーム社は、都市部における体験農園事業の他にも、様々な事業を展開している。一つには、週末有機農業学校「マイファームアカデミー」を開設し、新規就農希望者や、農を生活に取り入れたい社会人が、仕事を続けながら就農の準備ができる場を提供している。現在は、大阪・兵庫エリア、京都・滋賀エリアと、関西地方での開講に限られるが、農場実習と座学講座で有機農業を実践的に学ぶことができる。

耕作放棄地の活用に対する意思が強く感じられるのは、農園検索サイト「タガヤシ」である。マイファームに限らず、全国の体験農園・貸し農園・市民農園を募集し、それらを一括して「タガヤシ」の中で無料掲載している。マイファームの数はまだ数十と限られているが、このサイトを使えば、全国の農園の中から、自宅に近い農園を見つけることができる。「タガヤシ」を通じて利用者と農園が契約した場合には、オーナーの自己申告制で、マイファームが農園から成果報酬として 3,000 円を受け取る仕組みとなっている。既に農園として開園されているものだけでなく、耕作放棄地そのものも掲載されており、土地オーナーからの土地の貸し出しや買い取りについての案内を見ることができる。

マイファーム農園利用者専用コミュニティサイト「あつまれ！マイファーマー」では、利用者が情報交換したり、管理人からのアドバイスを受けたりすることができる。後述するが、週末農業としてのかかわり方が多いマイファームにおいては、農地で利用者同士が顔を合わせる機会が多いとはいえないため、畑に居ない時間に情報共有ができるこのサイトはそれを補完する役割を担っているといえる。

また、滋賀県の株式会社小林老舗との共同事業として、「よもぎプロジェクト」を運営している。「耕作放棄地には“よもぎ”を植えよう！！」をコンセプトとし、比較的栽培に手間や時間がかからず、利用法や効能も幅広いよもぎを栽培し、餅や入浴剤、石鹸、茶、麺などの商品に加工して販売している。

その他にも、厳選された菜園道具を販売する通販サイト「畑師」、農園の管理を志す人に向けた「菜園インストラクター検定」、マイファーム利用者に限らず、菜園利用者同士で意見交換や質問が自由にできる無料ポータルサイト「はたけ部」などの事業が展開されてい

る。

2.4. これまでの農園と何が異なるか

都市住民が利用する農業体験農園マイファームに立ち返ると、それが、最も普及している従来型の市民農園や、近年増加している農家が主催する農的活動・体験型市民農園と何が異なるか、理解しておく必要がある。

従来型の市民農園では、一般的に、耕作がなされていない農地を、地方公共団体や農協が運営主体となって整備し、近隣地域住民の希望者に区画を割り当てる形式となっている。しかし、樋口（1999）は、自治体の財政難により、都市計画としての市民農園の推進自体が困難となってきていることを指摘している。また、関東農政局が実施したアンケートによれば、市民農園が抱える課題としては、「利用者の管理が不十分（マナーが悪い）」が最も多い結果となったという。²²その多くが農業素人である地域住民が、仮に、全く知識や農業技術を教わらずに、独学に委ねられる環境下で農を営まざるを得ない状況を想定すると、上手くいかないことは容易に想像ができるし、それが利用区画に対するコミットメントを低下させることにも繋がりうるであろう。従来型の市民農園では、行政や農協の担当者の配属が、年度の切り替わり等に合わせて事務的に変わること、利用者との信頼関係が築かれにくくなるという問題もある。

一方、近年増えつつある農的活動・体験型市民農園では、1.6.で「農家ありきの農」という言葉を使って言及したように、基本的には、農家の作付け計画や指導のもとで都市住民が農を営んでいる。都市住民が農家を手伝う、支えるという目的のものが多く、必ずしも都市住民の自由な意思に基づく農が営まれている訳ではない。

マイファームでは、利用の在り方として、土地所有者ではなく、利用者の視点に重きが置かれているところに特徴がある。その意味では、従来型の市民農園に近いと言える。しかし、農地には、マイファームに所属する管理人が週 2～4 日、1 日当たり 3～6 時間程度のシフト制で管理に当たっている。管理といっても、各区画を手入れする訳ではない。管理人が直接手入れするのは、利用されていない空き区画や、利用者が共同で利用できる「共同区画」（詳細は後述）に限られ、利用者の区画に関しては、利用者からの質問に応じてアドバイスするにとどめる。または、有機農法であるがゆえに、季節や品種によっては、野菜に虫が付きやすくなるが、その被害が大きくなっているときや、収穫の時期を迎えていることに利用者が気づいていない場合には、先述のコミュニティサイト「あつまれ！マイファーマー」やメール等を通じて連絡をする場合もある。土地オーナーは、もともとその土地で生業として営農していた農家もいれば、親から農地を受け継いだものの、自身は農業には携わった事がなく、会社員として働いている人もいる。マイファームでは、農的活

²² 関東農政局が、管内市民農園の 337 の市民農園開設主体を対象に、平成 18 年 2 月から 3 月にかけて実施したアンケート。

動・体験型市民農園のように、土地オーナーが主導して利用者の指導に当たることはないが、土地オーナーがもともと農家として営農していた経験を持つ場合、オーナーが自らマイファームの管理人となり、利用者のサポートに当たるケースはあるという。また、土地オーナーの農業経験の有無にかかわらず、マイファームとして開園した後に、自らが利用者となって、1～2区画で農を営むケースが少なからずある。いずれにせよ、マイファームにおいては、運営者が作付けや指導を主導するのではなく、あくまで利用者が自らの主体性で農を営むことが求められている。簡単に言ってしまうと、従来型の市民農園の自由度が担保されながら、農を営むに当たって必要となる知識や技術を、専門性を持った管理人から必要なときに学べる仕組みになっているのである。農具や肥料、井戸が共有物として備え付けられていて、従来型の市民農園のように、私物を買って毎回持ち運びする手間がかからないことも、利用者の視点では重要な要素となっている。

3. 調査方法

3.1. 調査対象地

本研究が対象とする事例地は、埼玉県内に位置する、マイファーム大宮農園と、浦和農園の2つとする。²³大宮農園は、関東におけるマイファーム第1号として2009年4月にオープンした。大宮農園の管理人 U 氏によると、大宮農園は、もともと農地として利用されていた土地ではなかったが、代表の西辻氏がたまたま前職で土地オーナーと知り合い、その時に築かれた信頼関係によって、マイファームとしての開園に至った。関東での第1号農園だったこともあり、西辻氏はこの農園に対して強い熱意を持っており、整備の際には、京都からトラックで良質な土を運んで整備したという。²⁴

一方の、浦和農園の開園までの経緯はどうであったか。2010年の夏、マイファームの仕組みがマスメディアの注目を集め始めた頃、大宮農園とともに、付近にあるサッカースタジアムがTV映像に映った。孫に声をかけられてたまたまそれを見た農家のS氏は、それが自分の家の近所にあるサッカースタジアムであることを確認し、近所での取り組みとして成立しているのであれば、自分の農地もマイファームとして運用できるのかもしれないと考えた。そこで、すぐに代表の西辻氏に電話をし、面談の機会を持った。マイファームの集客シミュレーションにより、その土地環境であれば、十分に利用者が見込めるとの西辻氏の言葉を受けて、S氏は農地運用を委託することに決めたという。それからわずか2か月後、2010年9月に浦和農園の開園に至った。²⁵

²³ 浦和農園は、マイファーム社とNECビッグロブ社とで共同管理がなされており、正式には「BIGLOBEファーム浦和」という名称であるが、実質的な管理は他のマイファームの農園と変わらず、管理人もマイファームの人員が務めている。

²⁴ 2011年9月1日 大宮農園の管理人 U 氏への聞き取りより。

²⁵ 2011年11月6日 浦和農園のオーナー S 氏への聞き取りより。



写真 1 大宮農園（夏） 撮影：著者

周辺は老人福祉センターと農地に囲まれている。



写真 2 浦和農園（左：秋、右：冬） 撮影：著者

オーナー宅の目の前に広がる農園。

3.2. 聞き取り

本研究の調査対象とする農業体験農園「マイファーム」における主なアクターは、地権者（以下、オーナーと呼ぶ）、利用者として農作物栽培の主体となる都市住民（以下、利用者と呼ぶ）、マイファームから派遣され、利用者をサポートする管理人（以下、管理人と呼ぶ）の三者である。この三者への聞き取りを進めていく。それぞれへの聞き取りのポイントを、下記のように設定する。

- (i) 「オーナー」に対する聞き取りのポイント
 - (i-1) …農地に対する捉え方、思い。
 - (i-2) …利用者が営む農への評価
 - (i-3) …利用者や管理人との関係について
- (ii) 「利用者」に対する聞き取りのポイント
 - (ii-1) …利用の目的
 - (ii-2) …日常における農の意味、役割
 - (ii-3) …農家や管理人との関係について
- (iii) 「管理人」に対する聞き取りのポイント
 - (iii-1) …管理人の役割
 - (iii-2) …利用者が営む農への評価
 - (iii-3) …利用者や農家との関係について

3.3. 参与観察

著者自身も、2011年9月より、マイファーム利用者として農を営む。著者は、生来、日常において自然とのかかわりの薄い、「切れている」²⁶生活を過ごしてきた。1.1.で、「人と自然との関係性、全体性に基づく議論に参加するためには、その主体自身が、自然とのかかわりを生活の中で実現していることが求められるであろう。自然から切り離された生活に身を置きながら、人と自然のかかわりについて、議論の対象とする現場に思いを馳せることは困難であるし、自身が重ね合わせる体験を持ち合わせなければ、議論は想像の域を超えない」と述べたように、自身が「切れている」状態で本研究を進めていくことを少しでも回避したいという思いがある。また、今回、アンケート調査は行わず、個々人を対象とした聞き取りを行っていく。利用者に対しては、調査者としての立場で話をするのではなく、同じ目線の利用者として、利用者同士の会話の中から、重要な要素を抽出していきたい。それによって、より自然体の意見を聞き出すことを目指す。しかし、農家や管理人に対しては、客としての利用者の立場よりも、むしろ調査者としての立場の方が本音に近づける可能性があるため、その限りではない。

²⁶ 鬼頭秀一, 1996『自然保護を問いなおすー環境倫理とネットワーク』ちくま新書, 247 ページより引用

3.4. フィールド調査

聞き取り以外には、マイファームの農園の調査を行う。農園の各区画において、どのような利用がなされているかを観察することによって、利用者の意思を汲み取ることができると考える。農家による計画、管理に基づく農ではない、都市住民の自由な意思に基づく「遊び仕事」「遊び」としての農が、どのように展開されているかを見ていく。また、管理人や農家が主催するイベントにも参加し、三者の交流の様子についても観察する。

4. 農家（土地オーナー）の事情と思い

4.1. それでも守らなければならない農地

浦和農園のオーナーとなったS氏は、江戸時代から約300年続く農家の16代目である。代々、畑作と稲作を行ってきたが、父親が昭和30年代に養鶏を始め、最盛期には1万羽を飼育するに至ったという。S氏は、家業として養鶏を手伝いながらも、海外への興味を次第に膨らませていき、高校卒業後の19歳の時に、養鶏の勉強を理由にして1年間渡米した。その後も、バックパッカーとしてヨーロッパを旅するなど、農家の後継ぎでありながら、農地にとどまらない生き方を志向してきた。農地を離れ、東京の不動産会社の営業として2年間働いたこともある。漠然と、将来は通訳になることを夢に描いていた。

しかし、S氏が24歳になった頃、コレステロールが社会問題化したことなどをきっかけに、卵の消費が落ち込み、家業として養鶏を続けていくことが困難となった。S家が生計を維持していくためには、養鶏に代替する生業を新たに始める必要があり、S氏自身は、家が窮地に陥ったこの頃から、農家として生きていく覚悟を決めていった。新たに始めた生業は、つまものとして利用される山椒の若葉の栽培と、植木屋の仕事であった。S氏は、何か強い意思に基づいてこれらの仕事を選んだという訳ではなく、「近所の真似事」²⁷として始めたという。以降、この2つの仕事を30年余り続けていくことになる。

2009年に、再びS氏の生活を脅かす出来事が起きた。仕事中に腰を痛め、農業に従事できなくなってしまったのだ。農地は管理できなくなり、遊休地と化した。S氏の農地は、市街化調整区域に位置するが、簡単に農地以外の用途に転用することは許されず、一方で、自らが農地の管理を続けられる状況ではなく、S氏の言葉を借りれば、「選択肢のない状態」²⁸に陥った。例えば、市街化区域に指定されるのを待って、不動産経営ができる日を待つことなど、自分が生きている間には到底起こりえないだろうと考え、それも現実的な選択肢にはなりえなかった。

S氏にとって、農地とはどのような意味を持つ場であったのか。もともと、S氏には、農家という家業を自らの生き方として容易に受け入れることができた訳ではない。農地はあくまで、「意思とは無関係に、受け継いだもの」²⁹であった。しかし、腰を痛め、営農ができなくなったとき、農地を農地として保全することについては、役所の決め事だから、ということだけではなく、そうしなければいけないという自らの意思も働いたという。まず、300年受け継がれてきたものを、自分が絶やす訳にはいかないという思いがあった。そして、仮に土地を売ることができたとしても、その土地が売り手にどう利用されるかが気

²⁷ 2011年11月6日 浦和農園のオーナー S氏への聞き取りより。

²⁸ 2011年11月6日 浦和農園のオーナー S氏への聞き取りより。

²⁹ 2011年11月6日 浦和農園のオーナー S氏への聞き取りより。

がかりになっただろうと話す。S家の周囲には、明治時代初期から続く農家など、S家と同様に、歴史の長い家々が並ぶ。もし自分が売った土地に、高層の建築物が建てられたとすれば、日照や景観の問題で、近所に迷惑をかけてしまう。実際に近所では、売られた土地に高層の建築物が建てられ、周囲に悪影響を及ぼす例を目にしてきた。自分はその原因になりたくないとは常々考えてきたという。S氏にとって、農地とは、自分の意思とは無関係に受け継いだものではあるが、それでもやはり、守っていかなければならないものであった。マイファームを知るまでは、「タダでもいいから、誰か農地として管理してくれる人はいないか、という位の気持ちもあった」³⁰と話している。

4.2. 農家でも、指導はできない

営農ができなくなり、農地の管理もままならない。取るべき選択肢が見つからない状況が続いていた時に、S氏はTVのニュース番組を通じてマイファームの存在を知った。代表の西辻氏にコンタクトを取ると、西辻氏はS家周辺の状況を調べ上げ、体験農園として開園した際の収支シミュレーションを行い、十分に運営が可能であることをS氏へ伝え、両者は開園の合意に至った。2010年9月に浦和農園が開園すると、利用者がまたたく間に集まり、約40区画が埋まった。しかし、2011年3月に発生した東日本大震災の影響で、それまで順調に伸びていた新規利用の希望者が途絶えがちとなり、反対に、辞めてしまう利用者也出てしまったという。現在³¹は、約30区画が利用されている状況で安定しているが、S氏の所有する農地は約1,200坪あり、約100～120区画まで拡張ができるため、今後、再び利用者が増えていくことを期待している。

経済的観点で、マイファームとしての土地利用をどのように評価しているかをS氏に尋ねたところ、十分に満足できる水準の収入が得られているという。「はっきり言って、土地を預けているだけで、これだけもらえるなら有難い」³²とのことである。1.4.で見た阪口・大江(2003)の調査でも、体験農園が農業経営として十分成立しうることが示されていた。

S氏は農家なのだから、マイファームを介さずに、自ら主導して、都市住民を対象とした農的活動・体験型市民農園を運営することは考えられなかったのかと尋ねると、それは今でも考えられないと即答された。S氏は、その理由を次のように述べる。「自分はプロの農家としてやってきたが、ごく限られた品種しか扱ってきていない。やってきたものは分かるけど、それ以外のものを教えろって、それは無理。だって、やったことがないんだから。」³³安室(2008)によれば、生業として農業を営む農家は、生産効率を重視するため、傾向として少品種・多量生産になる一方、市民農園では、その「遊び仕事」としての農で

³⁰ 2011年11月6日 浦和農園のオーナー S氏への聞き取りより。

³¹ 2012年1月現在

³² 2012年1月10日 浦和農園のオーナー S氏への聞き取りより。

³³ 2012年1月10日 浦和農園のオーナー S氏への聞き取りより。

ある特性から、多品種・少量生産の傾向が見られるという。先の S 氏の発言は、私たちが次のことを認識する必要性を投げかけているように思われる。これまで農家が営んできた生業としての農業と、近年都市住民が求めている「遊び仕事」「遊び」としての農は、その性質が大きく異なるため、農家が利用者のニーズを満たすよう指導することは、意識の問題でどうにかなるものではなく、むしろ実質的に困難な場合も多いのではないかと、いうことである。農家が自主的に農的活動・体験型市民農園を始めるに当たっては、利用者の募集や契約、集金などの不慣れな業務をこなす負担がかかる問題があることを先述したが、そもそも、「遊び仕事」「遊び」としての多品種・少量生産の農、利用者ごとに異なる個別的な農には対処できないという S 氏の発言は、著者にとっては新たな気づきとなった。

4.3. オーナーの自己実現と、「遊び仕事」としての農

現在の S 氏の生活の中心にあるのは、世界中から来日する外国人を自宅に受け入れるホームステイ事業である。S 氏の自宅は広く、家族が利用していない空き部屋がいくつもあった。それらを有効に使いたいという思いと、もともと海外へ抱いていた強い関心が組み合わさり、自宅に外国人の学生や社会人を受け入れるホームステイ事業に結実した。約 5 年前から徐々にスタートし、最初は語学学校からの紹介という形で受け入れをしていたが、最近では、世界中のホームステイ希望者と受け入れ先とをマッチングする専用 WEB サイトを利用して受け入れを行っている。都心からは多少離れた立地であるが、一泊二食付で約 3 千円と割安で宿泊できることと、300 年続く日本の伝統的家屋に宿泊することに魅力を感じる外国人は多く、アメリカ、フランス、インドネシア、コロンビアなど多くの国々から、常に数人が滞在している状態だという。「うちには古くからの仏壇や神棚もあるし、障子と畳の部屋に泊まることもできる。東京で洋風の部屋に滞在したら便利だけど、それじゃあ日本の良さをなかなか実感できないでしょう。」³⁴短期の滞在だけでなく、気に入って、半年～2 年間滞在する人も多く、これまでに、既に 40 人もの外国人を受け入れてきた。格安での受け入れのため、「常に 4～5 人は受け入れていないと、割に合わない」³⁵と S 氏は苦笑交じりに話す。しかし、もともと通訳になることが夢で、若い頃に世界を渡り歩いていた S 氏にとって、このホームステイ事業は、金銭的な意味よりも、生きがい、自己実現としての意味合いが強いように見受けられる。今後について、S 氏は、「日本の自然、言語、伝統、文化を、より幅広く伝えていける場にしていきたい。」³⁶と夢を膨らませている。「日本で困っている外国人を見ると、助けたくなくなっちゃうもんだよ。」³⁷現在、S 氏の名刺には、「通訳」の肩書が記されている。

³⁴ 2011 年 11 月 6 日 浦和農園のオーナー S 氏への聞き取りより。

³⁵ 2011 年 11 月 6 日 浦和農園のオーナー S 氏への聞き取りより。

³⁶ 2012 年 1 月 10 日 浦和農園のオーナー S 氏への聞き取りより。

³⁷ 2012 年 1 月 10 日 浦和農園のオーナー S 氏への聞き取りより。

これまでの常識では、農地を守る使命を果たすこと、それは即ち、農地に目の届く環境を生活圏とし、自らの手で管理し続けることを意味したであろう。マイファームによる農地管理に切り替えた S 氏にとっても、前者の生活圏については変わっていない。しかし、管理の主体がマイファームの管理人、利用の主体が都市住民に移ったことにより、S 氏は、農地に目の届く環境に身を置きながら、ホームステイ事業を通じて、自らの夢の実現に向けて邁進することができるようになった。また S 氏自身も、農とのかかわりを継続している。2 区画分を利用し、自ら葱やにんにくなどを栽培している。腰を痛め、所有する農地のすべてについて、生業を通じて管理することはできなくなったが、20 m²相当の 2 区画分であれば、「遊び仕事」「遊び」の農として、十分に継続することができる。農地の所有と利用の関係を組み替えることで、農家がそこで営む農の性質も変容しうることは興味深い。

4.4. 農地をめぐる三者の信頼構築の場

S 氏は、数か月に 1 度、管理人や利用者に自宅を開放して、バーベキューを行っている。開園からの 1 年で、これまでに 3 回実施している。これは、「感謝の気持ち」³⁸だという。浦和農園では、S 家の目の前に農園があるため、バーベキューでは、S 氏が自分の区画で育てる葱などの野菜や、利用者が育てている野菜もその場で収穫し、焼いている。利用者の有志が自宅で用意した手料理を持ち寄り、S 家に滞在する外国人も参加して交流を楽しんでいる。こうした機会を通じて、農園にかかわるアクターとしての、土地オーナー、管理人、利用者の三者が信頼関係を築く様子が見受けられた。



写真 3 浦和農園の掲示板 撮影：著者



写真 4 バーベキューの様子 撮影：著者

農園で収穫した野菜を焼くのも楽しさの一つ。

³⁸ 2012 年 1 月 10 日 浦和農園のオーナー S 氏への聞き取りより。



写真 5 談笑する様子 撮影：著者
S 家にホームステイする外国人も交流する。



写真 6 利用者が料理を持ち寄る 撮影：著者

5. 人と農地、人と人をつなぐ管理人

5.1. 管理人の意識と役割

マイファームの管理人になるためには、日本リトルファーマー協会が主催する「菜園インストラクター」という資格を取得する必要がある。資格の取得に当たっては、座学と実習の受講が求められる。座学では、種まき野菜、苗植え野菜それぞれの基本的な育て方から、無農薬栽培、土づくりや肥料のテクニック等についての知識を身に付ける。実習では、実際に農園で種まきや苗植えを行う他、農機具の使い方など、菜園づくりのノウハウを学ぶ。一連の講習を受けた後、技量を認められた認定者が、マイファームの管理人になることができる。

現在、浦和農園の管理人である O 氏は、約 8 年前、自身の生き方を見つめ直そうと決意してそれまで勤めていた会社を退社し、沖縄で農家の指導を受けながら、自給自足に近い生活を 5 年間送ることとなった。ゆるやかな時間の流れの中で、農についての知識や技術を身に付けていくと、次第に、より多様な品種を栽培できる本州で農を営みたいと考えるようになり、地元の埼玉へと戻った。それからの 2 年間は、通販会社へ勤めて生計を立てながら、自宅付近の市民農園で野菜を育てる暮らしを送った。沖縄に居た頃から、作って食べるという人間らしい生き方を、現代的な生活の中でいかに実現しうるか模索していた O 氏は、ある日、マイファームの存在を知り、その理念に共感し、そこで管理人として働くことを決めた。

O 氏は、さいたま北エリアの SV（スーパーバイザー）としての肩書を持ち、週 1～2 日、1 日当たり 6 時間程度、浦和農園で管理人として働くとともに、平日はマイファーム社の東京オフィスで事務的な業務もこなしている。最近開設された松伏農園³⁹の立ち上げにも関与し、土地オーナーと協力しながら、農園の充実化を図っている。O 氏はこれまで、経済的価値に軸が置かれた生業としての農業を営んできたわけではない。沖縄で自給的な暮らしを送りながら農を学んでいた時も、働きながら市民農園で野菜を作っていた時も、マイファームの管理人として働く今も、O 氏によって営まれてきた農が、経済的価値に交換するための栽培活動であったことは一度もない。その意味では、「遊び仕事」「遊び」としての農の出身者、と呼んでもいいかもしれない。O 氏にとっての農の価値とは何なのか。「育てる事そのものの楽しみ」⁴⁰だという。どう手を加えると、どう育つか。その実践と失敗を繰り返す中で、農の深みにどんどんはまっていった。O 氏は、「食べる」結果よりも、「育てる」過程にこそ、価値を見出している。「失敗した時に、やり方を変えてみる。そうすると、次は上手くいくことがある。達成感がありますね。私の場合は、より良く成長するの

³⁹ 2011 年 11 月に、埼玉県北葛飾郡松伏町にオープンしたマイファーム農園。

⁴⁰ 2012 年 1 月 8 日 浦和農園の管理人 O 氏への聞き取りより。

を見ることが楽しいんです。でも、気候の影響でダメになっちゃう時も多いんですけど。それはしょうがないですよ。自然は不確実ですから。その中でやっていくしかない。」⁴¹「遊び仕事」「遊び」の農において、制約として考慮されるのは、自然の都合のみである。この土地、気候、時期では、この野菜は育てられない、という自然的制約のみを考慮すれば、何を栽培するかは、栽培主体の自由な意思で決められる。市場価格に合わせて、野菜の価値付けをする必要もない。挑戦したいもの、食べたいもの、おすそ分けしたいものといった個々の観点で、季節ごとに栽培する野菜を決めていく。O氏は、利用者を次のように評価する。「やっている中で、夢中になっていく人が多いですよ。手をかけていけば、意外と育つし、育つと楽しいですからね。自分で熱心に勉強しながら取り組んでいる人も多いです。」「私たち（管理人）の仕事は、はじめたばかりの良くわからないときとか、上手いかわからないとき、気持ちが畑から離れそうになっているときに、どうサポートできるか、だと思っています。」⁴²

著者がO氏に出会ったのは、真冬の浦和農園でのことである。温室栽培などは行われないマイファームの農園では、秋の収穫が終わると、冬場は栽培活動が活発には行われない。一通り収穫をし終えた畑では、春の作付けに向けて、土の表層と深層を入れ替える「天地返し」をして約1ヶ月間土の消毒を行うが、小さい区画では、この作業はそれほどの時間と労力を伴う訳ではない。農地に行っても、できることが限られるため、利用者の足が1年を通して最も遠のく時期となる。管理人がシフトに入る時間帯に、利用者が1名も現れないことも稀ではない。それでも、管理人は、農園へ通い続ける。季節を問わず、管理人が必ず農園に居ることが、マイファームの一つの重要なステータスになっていることについては後述する。凍えそうに寒いこの日、O氏は、午前9時から午後3時まで、6時間に及ぶ長時間のシフトに入っていた。寒い上に、少し退屈ではないかと尋ねると、そんなことはないという。「畑では、やることはいくらでも見つけられる。利用者の野菜の状況を一つ一つ確認しているし、土にクワを入れていけば体も暖まります。」⁴³O氏と著者が話をしている途中、オーナーのS氏が犬の散歩で横を通りかかり、しばらくの間会話に加わった。利用者の来園が途絶えがちになる季節にも、こうして管理人が農園を守っている姿がオーナーの目に留まることで、両者に信頼関係が築かれているのだろう。

農地にいると、色々と意欲やアイディアが沸いてくるという。立ち上げからかかわっている松伏農園は、2011年11月に開園したばかりで、まだ利用者が1組しかいないが、積極的な姿勢のオーナーと、共同区画の整備を計画するなどして、今後の活性化に意気込んでいる。

⁴¹ 2012年1月8日 浦和農園の管理人 O氏への聞き取りより。

⁴² 2012年1月8日 浦和農園の管理人 O氏への聞き取りより。

⁴³ 2012年1月8日 浦和農園の管理人 O氏への聞き取りより。

5.2. 効率の農と、遊びの農の狭間を揺れ動く

浦和農園の立ち上げ時からのスタッフとして、管理人を務めていた T 氏は、植物栄養学や土壌微生物学について研究する大学院生である。机上の理論にならないようにと、学部時代の 4 年間は、プロの農家のもとへ通い詰め、生業としての農業を、自分の身体を通じて体得してきた。卒業後は、東証 1 部に上場する大手農業関連会社に就職することが決まっており、研究開発部門への配属を希望している。世界の人口爆発に伴う食糧不足の回避と、もともと収量に恵まれない日本の農業を改善するためには、農業の一層の「効率化」は避けて通れない道だと確信している。修士論文の執筆のため、2011 年 11 月で管理人を退任したが、その専門性の高さは、マイファーム社代表の西辻氏も認めるほどで、同僚やオーナー、利用者に惜しまれながらマイファームを去った。

「よく 1 年間、マイファームで続けられたなあと思いますよ。ある意味、マイファームの思想は、僕がやってきたこと、これからやっつけようとする 것과真逆な訳ですからね。別の言い方をすれば、自分のやり方を否定されているというか…」⁴⁴と苦笑交じりに話した。T 氏の専門領域は、マイファームで行われているいわゆる有機農法や自然農法ではなく、慣行農法の延長にある。窒素肥料の硫酸アンモニウムといった化成肥料を、現場で効果的に利用できるよう改良していくことが、T 氏の研究テーマである。一方で、マイファームでは、化成肥料の使用そのものを禁止している。使えるのは有機肥料のみで、バクヤーゼ堆肥や MB 動物有機肥料などが各農園に用意されている。

なぜ、T 氏はマイファームの管理人を始めたのか。「自宅の近くに農園ができて。シフトを柔軟に入れられるから、学業を中心にしながら働けたんですね。」⁴⁵というのがその理由だ。いざ管理人としての仕事を始めると、利用者ごとに、求められる要望の質が大きく異なり、驚いたという。基本的に自分で勉強しながらやっていくから、どうしても分からなくて聞いたときだけ教えてくれればいいという利用者もいれば、手取り足取り、全て教えて欲しいという利用者もいた。T 氏がかかわってきた利用者の範囲では、前者のようなタイプは中高年層に多く、農を今後の生活の中心に据えていきたいという意図が傾向として見られたという。一方、後者の依存性が高いタイプは、若い利用者に多く見受けられた。それまで接客などの経験がなく、利用者とのコミュニケーションを上手くとれるかに不安を抱いていた T 氏は、できる限り誠実に、農についての知識を正しく、分かりやすく伝えることを意識して対応に当たるようにしていた。但し、自分の主義主張は封印し、あくまでマイファームの管理人としての立場で、効率や効果よりも、「いかに楽しく続けてもらえるか」ということを最優先事項として念頭に置き、利用者に接するよう心がけていた。それでも、知識を身に付けた利用者からは、T 氏が一通りの説明をした後に、「それで、本当のところはどうなの？」と聞き返されることも度々あったという。管理人としての T 氏の

⁴⁴ 2011 年 10 月 30 日 浦和農園の管理人 T 氏への聞き取りより。

⁴⁵ 2011 年 10 月 30 日 浦和農園の管理人 T 氏への聞き取りより。

発言だけでは飽き足らず、農についての知的好奇心の高まりから、より専門的な知識についても求めてきたのではないかと T 氏は分析している。

「最初は葛藤もありましたが、やっていくうちに、こういう農もありなんだなと、思うようになっていきました。皆が皆、ちゃんと続けられる訳ではなくて、だんだん利用者が来なくなってしまって、十分に手入れがなされていない区画もやっぱりありますよ。でも、思った以上に、感覚をつかんだ人はどんどん自主的にやっていきますね。」「(マイファームの管理人を務めて、) 今では、(自分とは) 逆の視点を持てるようになったという意味でも、やってよかったと思っています。片方しか知らないで主張するのと、両方分かっているのでは全然違いますから。」⁴⁶

5.3. 求心力は、密なコミュニケーションと対応の誠実さ

関東での第 1 号農園として 2009 年に開園した大宮農園では、現在 40 区画中、35 区画が利用されている。⁴⁷ 管理人の U 氏は、浦和農園の O 氏や T 氏とは異なり、マイファームに関与する前は農に対して完全な素人であった。祖父が農家で、幼い頃から農業に触れる環境下で育ったが、それでも「全く興味がなかった」⁴⁸ と言う。大学では公園の測量について学んだが、やはり農業とは無縁であった。結婚した後、自分の自由な時間が多くできるようになると急に、農のある暮らしに対しての憧れが強くなっていったという。

農への関心を持った都市住民は、市民農園や体験型市民農園の利用者になることを検討するのが一般的なように思われるが、U 氏の場合は、農業素人であったにもかかわらず、農のある暮らしを始めるとともに、それを仕事にすることを志向した。菜園インストラクターの講習を通じて、一通りの知識と技術を身に付けたとはいえ、他の農園の管理人たちと比べれば、U 氏の農に対する専門性は決して高いとはいえないようである。加えて、管理人が 3 人体制の浦和農園に対し、大宮農園では U 氏が実質的に 1 人で管理しており、利用者の農を支えられているかどうか気がかりであった。

しかし、著者の懸念とは裏腹に、大宮農園ではほとんどの区画が利用されており、U 氏が主催する農地でのイベントには、多くの利用者が参加してにぎわっている。大宮農園の利用者の 1 人である A 氏は、マイファームを利用している理由として、「管理人の U さんの存在が最も大きい」と答える。⁴⁹ ちなみに U 氏によると、A 氏は、素人としてマイファームの利用を開始したが、U 氏からのアドバイスを受けながら、独学を重ね続け、今では農にかなり習熟しているという。「A さんは本当にすごいです。最初は 1 区画ではじめたんですけど、今は物足りなくなったのか、利用を 3 区画に広げていますし、他の農園も利用

⁴⁶ 2012 年 1 月 11 日 浦和農園の元・管理人 T 氏への聞き取りより。

⁴⁷ 2012 年 1 月現在。

⁴⁸ 2011 年 9 月 1 日 大宮農園の管理人 U 氏への聞き取りより。

⁴⁹ 2011 年 9 月 18 日 大宮農園の利用者 A 氏への聞き取りより。

しているみたいです。男の人には結構多いんですけど、作ること事態が目的になってしまっているみたいで、大量に収穫して持ち帰ると、奥さんやお母様は少し困ってらっしゃるみたいですけど。」⁵⁰と U 氏は笑いながらも感心した様子で話した。そこまで習熟した利用者が、管理人の U 氏を必要とする理由はどこにあるのか。「熱心さですね。聞いても分からないような場合は、調べてきて、次の週には教えてくれるような。」⁵¹と A 氏は答える。著者自身も、大宮農園の利用者であるが、確かに U 氏の対応には特筆すべき点がありそうだ。例えば、同じ時間帯に 4 組の利用者が訪れていると、必ずその全ての組のもとへ順番に回り、笑いを交えながらそれぞれにアドバイスを行っていく。著者が、自分の区画でいちごの成長が止まっている問題を伝えた時、「うーん、何ででしょうねえ。」という歯切れの悪い回答が返ってきたのみであったが、その後、真冬の寒さを緩和させるための手当てとして、もみがらを土の表面に敷き詰めることを提案してきて、作業を一緒にやってくれた。専門家としての立場からの指導というよりは、利用者により近い、同じ目線で一緒に悩む姿勢が好感に繋がっているように見受けられる。また、自身がその場で分からないことについては、より専門性の高いスタッフにその場で電話をして確認を取るほか、次の週までに確認をしてくるよう努めているようだ。

U 氏とは対照的に、知識と経験を以って利用者の対応にあたっていた浦和農園の T 氏であるが、U 氏の管理人としての在り方を高く評価していた。「もちろん、農についての専門知識は必要ですが、管理人として一番大事なものはコミュニケーション力だと思います。U さんはその点がすごいです。利用者が農園に来る頻度とか、どれだけ楽しくやれているかとかにすごく関わっていると思いますよ。」⁵²大宮農園と浦和農園が近接していることもあり、イモ掘り大会などの利用者向けのイベントを開催する際には、U 氏と T 氏は互いの会に手伝いに行き、運営を支え合っていた。

5.4. 地域と農園の触媒としての管理人

大宮農園は、老人福祉センターと他の農家が営農する農地とに囲まれた立地にある。老人福祉センターに通う人の中には、もともと農業を営んでいた人もおり、U 氏が農園に居る時には顔を出して、農についての意見交換をしたり、単純に談笑をしたりして楽しんでいる風景も見受けられた。隣接する農地の農家も、U 氏とは良好な関係を築いている様子で、しばしば声をかけあっている。「利用者さんが居ない時間帯も多いですからね。そういうときに、お隣さん（老人福祉センター）の方や農家の方とお話ができるのは、とっても楽しいんですよ。」⁵³と U 氏は語る。農園の脇を通りかかる周辺住民とも顔見知りになって

⁵⁰ 2011 年 9 月 25 日 大宮農園の管理人 U 氏への聞き取りより。

⁵¹ 2011 年 9 月 18 日 大宮農園の利用者 A 氏への聞き取りより。

⁵² 2012 年 1 月 11 日 浦和農園の元・管理人 T 氏への聞き取りより。

⁵³ 2011 年 10 月 30 日 大宮農園の管理人 U 氏への聞き取りより。

いるそうだ。

2.4.で、市民農園の第1の問題点として、「利用者の管理が不十分（マナーが悪い）」が指摘されていることに触れた。もちろん、利用者の農園での素行が悪いことや、片づけ等が不十分であることも考えられるし、営農の仕方そのものに不満を抱かれる場合もあるかもしれない。しかし、市民農園の利用者と地域住民・周辺農家の間に溝が生じるとすれば、農地へのコミットメントに対する両者の捉え方の相違が、少なからずそこに影響しているのではないかと、著者は考える。

市民農園への個々の利用者のかかわり方は、生業としての農業とは大きく異なり、いわゆる週末ファーマーとしての通い方を前提としている場合が多い。時間を比較的自由に使える定年退職後のシニア層の利用者は別としても、平日は仕事をしていて、休日に子供を連れて農園を訪れる親子連れの利用者などは、そのような通い方をせざるを得ない。著者はいくつかの市民農園を訪れているが、特に平日においては、どこも利用者がほとんど見当たらず、閑散とした状況となっている。また、利用者が週に1、2回農園を訪れるとしても、農園での平素の営みは、雑草を抜いたり、害虫を取り除いたりするちょっとした手入れが中心であり、作付けや収穫の時期でもなければ、長時間滞在する必要がない。著者が農園を観察してきた限りにおいては、熟練した利用者ほど、その時々で農園に訪問する目的が明確になっているようで、手入れの手際も良く、その結果1回当たりの滞在時間が短いように感じる。つまり、市民農園というと、各区画の利用者が集まって、お互いに顔を合わせて談笑しながら作業をしているイメージを持たれる事も多いかもしれないが（少なくとも著者は、本研究に携わるまでそのようなイメージを抱いていた）、実際には、冬場に限らず、1年を通してほとんどの時間帯で、農園は人気が少ない閑散とした状況になっている。利用者が数組同時に作業をしている時間帯があるとすれば、週末の午前～昼過ぎの時間帯くらいである。これは、従来型の市民農園の利用者に限らず、マイファームの利用者についても同様に当てはまることである。週末ファーマーとしての農、本研究で扱う言葉で言い換えれば、「遊び仕事」「遊び」としての農が、農園への頻繁な、長時間のコミットメントを要さず、利用者それぞれのペースで、少ない頻度（週に1～2回）、短い滞在時間（30分～2時間程度）で営まれていると理解するのが現状に即しているように思われる。しかし、ここまでは利用者側の視点で述べてきたが、こうした少頻度・短時間の農の在り方が、周辺の住民や農家に理解されるかは別の問題として存在する。閑散とした農地の光景を日頃から目にしていれば、周辺の住民が、その利用の実態について不安視することは十分起こり得る。また、隣接する農地で生業として営農する農家にとっては、そもそも「遊び仕事」「遊び」としての農に対する認識や理解があるとは限らず、マイファームの利用者が、自分ではきちんと管理ができているという認識を持って農を営んでいたとしても、周辺農家には、そうした認識をされない可能性もある。2.2.で触れたように、無農薬栽培を推奨するマイファームにおいては、雑草が飛散して周辺の農家や住宅に迷惑をかけてしまうことへの懸念もある。したがって、農園内に閉じない、地域との関係性における責任や役

割を果たすことも求められるであろう。

マイファームの管理人は、冬場であっても、例え利用者が 1 人も訪れない時間帯であったとしても、農園に立ち続ける。その姿を遠くから眺めると、失礼かもしれないが、「生きたかかし」⁵⁴のようにも見える。利用者が居ないときに、やるべき作業を一通り終えて、立ち尽くして景色を眺めている様子を見ると、少々不憫に思われるときもある。しかし、この管理人の存在が、地域と農園とを結ぶ触媒になっていると著者は考えている。管理人が農園に居る時間の本来の目的は、利用者のサポートであり、空き区画や共同区画の管理であり、利用者の区画の観察である。だが、それらに劣らず、農園に居続けることそのものにも価値を認められるのではないか。

2011 年の秋に、大宮農園の管理人 U 氏が主催したイモ掘りイベントでは、大宮農園の利用者たちが集まり、6 月に共同区画に植えられたサツマイモを収穫した。実は、6 月に植えたサツマイモの種は、管理人の U 氏が、隣の老人福祉センターに通う農家の J 氏から提供されたものであった。J 氏は、この収穫の日を楽しみにしており、大宮農園の共同区画を覗きに来た。利用者が収穫したサツマイモを見て、「思ったよりずっと育っていて安心したよ。うちで今年収穫したのはあんまりうまくいかなかったもんだから。やっぱりここ(大宮農園)は土がいいんだよね。」⁵⁵と J 氏は嬉しそうに話していた。

複数の都市住民が、個々の事情や関心に合わせて農園を訪れるマイファームにおいては、その特性として、少頻度・短時間の滞在となる傾向が見られるため、利用者と周辺地域の住民とが関係を築くことが構造的に難しい面がある。しかし、管理人が農園に居ることで、すなわち彼らが農園の顔として地域から認識されているのである。仮に、農園の利用の在り方が同じであったとしても、農園の顔としての管理人が見えるのと見えないのとでは、周辺地域住民の農園に対する評価は異なってくるのではないか。その手がかりとして、J 氏は、農園利用者でないにもかかわらず、U 氏を通じて農園や利用者につながり、農園が地域の中に位置づけられる可能性を示してくれた。マイファームに関与する前は農業素人であった U 氏も、大宮農園の管理人となってから間もなく 3 年を迎える。

⁵⁴ 著者による表現。農地を守る存在としてのイメージを「かかし」という言葉で示した。

⁵⁵ 2011 年 10 月 30 日 老人福祉センターの利用者で、農家でもある J 氏への聞き取りより。

6. 参与観察による農の実践

6.1. 除草、耕起から作付けまで

著者は、2011 年 9 月より、マイファーム大宮農園の利用者として農を始めた。本項では、全くの素人としての利用者が、マイファームにおいてどのような手順で農を営み始めているのか、自身の経験をもとに記述していく。

市民農園や体験農園の利用を始めるのに適した季節は、作付けの時期である初春か初秋であるという。著者が 9 月に利用を始めたのは偶然であるが、その意味では良い時期であった。農園の下見をし、1 年間の契約手続きをしたら、初年度運営費 10,500 円と月額利用料の 1 年分を、契約から 1 週間以内に指定口座へ振り込む。一括の前払いとなると相当な金額になるため、しっかりやっていかなければと気が引き締まる。利用区画は、空き区画の中から、日当たりや農具置き場、井戸からの距離などを基準に選ぶ。著者が選んだのは、大宮農園の中央に位置する区画だった。管理人の U 氏によると、著者が選んだ区画は、季節によっては隣接する老人福祉センターで日照が遮られる時間帯もあるとのことだったが、より日当たりの良い区画は、農園の端の方に位置していたため、農具置き場や井戸からの距離を優先して結局中央の区画に決めた。区画の大きさは、 $3\text{m} \times 4\text{m} = 12\text{ m}^2$ である。

区画利用の開始日は、当然、指導を受けたいので、管理人のシフトの時間帯に合わせて農園に向かう。作業の一切は利用者自身が行うが、一つひとつの工程について、管理人の U 氏が丁寧に指導してくれる。まずは、カマを使って区画内の除草作業に当たる。除草が完了したら、耕運機を使って耕起し、固まった土を柔らかくほぐし、通気性や通水性を高める。耕起には、同時に、前の利用者による前作作物や雑草を土中に埋める意味合いもある。次に、クワを用いて数畝作り、寒くなる季節に向けて、畝の一つにマルチを張った。ここから作付けに入るが、種や苗については、季節に合う作物を一通り事前に U 氏から聞いた上で、ホームセンターで購入をしていた。「最初のシーズンなので、まずは作ってみたいと思うものを用意してみましょう。」⁵⁶とのことだったので、冬の鍋に入れるものを手掛かりに選んでいった。ただし、マイファーム社としては、苗よりも、なるべく種から育てることを推奨しているとのことであったため、種の比重を高くすることは意識した。著者が用意したのは、下記の品種である。

種：ハウレンソウ、春菊、小葱、白菜、二十日大根、宮重大根

苗：小松菜、紫キャベツ、いちご

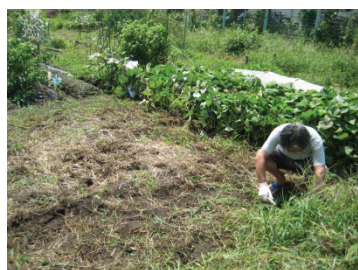
12 m²という小さい区画であっても、1 種あたりの収量にこだわらなければ、それなりの

⁵⁶ 2011 年 9 月 8 日 大宮農園の管理人 U 氏への聞き取りより。

品種数に挑戦することができる。酸性土壌に弱いホウレンソウの種を植える前には、酸度を中和するため石灰をまいた。作付けが終わった後は、大宮農園に備わっている井戸から水を汲み出し、ジョウロで区画まで運んで水をやり、初日の作業はこれで完了となる。



手を付ける前の区画



手作業で除草を行う



除草完了



耕運機を用いて耕起する



クワを用いて畝を作る



3本の畝が完成



保温のためマルチをかける



種を植える



苗を植える



井戸水を利用



水の運搬はジョウロで



石灰で土壌の酸度を中和

写真 7～18 初日の農作業 撮影：著者

6.2. 手入れ



写真 19 作付けから1週間後に、発芽していた小葱や大根。 撮影：著者

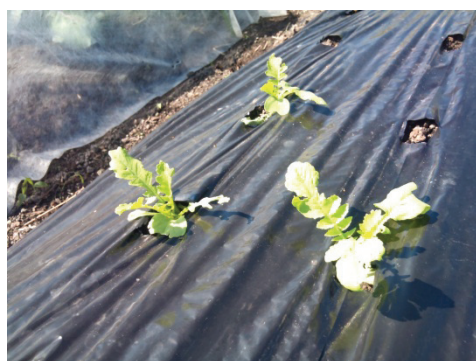


写真 20 数日で大根の若葉が顔を见せる 撮影：著者



写真 21 周囲には、虫を防ぐために新たにレタス類を植えた。 撮影：著者

管理人の U 氏によると、農を始める前の多くの利用者が共通して、「水を頻繁にやりにこななければいけないのではないか」と考えているそう。しかし実際には、それほど水やりに気を使う必要はないという。畑の土は保水力が強く、土の表層が乾くと、土中の水分が上がってくるというのだ。確かに、少し土を掘ってみると、水分を含んだ粘土質の土が現れる。乾きやすい暑い季節や、水分を多く必要とする野菜の育て始めなどには、水やりの意識は必要だが、それ以上に注意すべきは、有機農法であるがゆえに特に必要となる草取りと害虫の駆除である。雑草は、苗よりも大きくならない程度においては、ある程度放っておいても良いとのことであったが、害虫については、作付けから一週間後に既に何匹か見受けられ、放っておけば若葉がどんどん食べられてしまうので、駆除の必要があった。マイファームでの農においては、最も気をつけるべきことのひとつであると言ってもよさそうである。U 氏も、「ヨトウムシとか青虫を見つけたら、心を鬼にしてすぐに駆除しないと、人間が食べる部分がなくなります。」

⁵⁷と、その必要性を強く訴えていた。

作付けから1週間目で、大根や小葱、ホウレンソウなど、いくつかの種は早くも発芽していて、苗から始めた小松菜や紫キャベツにも成長が見られた。作付けからたった1週間で、わずかではあるが、発芽と若葉の成長という最初の手ごたえを感じることができ、同時に、生まれたばかりの生命が早くも害虫に襲われている状況を目の当たりにすると、手入れをしていくことへの意欲と責任が芽生えていくようであった。U 氏の指導のもと、小松菜や赤キャベツの周囲に虫が敬遠するレタスを植えたり、寒さと虫の両方を防ぐ不織布をかぶせたりする等の手入れも行っていた。

⁵⁷ 2011 年 9 月 8 日 大宮農園の管理人 U 氏への聞き取りより。

6.3. 収穫



写真 22 作付けから3週間後の区画。収穫の時期を迎える。 撮影：著者



写真 23 春菊を収穫。 撮影：著者



写真 24 子葱につかまるアマガエル。無農薬栽培のため、多く見られる。 撮影：著者

作付けから2～3週間もすると、若葉を間引いて食べることもできるようになってくる。管理人のU氏は、「スーパーに行って買えるのは、完成した野菜だけじゃないですか。畑をやっていて嬉しいことの一つは、こうやって若葉を間引いて食べられることなんですよ。例えば、大根の若葉だったら、その日の夕食のお味噌汁に入れると、すっごくおいしいです」⁵⁸とその魅力を語る。

10月の初旬には早くも収穫の時期を迎えた。ホウレンソウ、春菊、小葱、二十日大根、小松菜などを、一斉に収穫することができた。畑でとれたものが、数時間後には食卓に並び、新鮮な状態で食べることができる喜びは大きい。しかし、一度の収穫量が多くなると、数日で自家消費しきることはできない。特に、著者の場合は、利用区画の12㎡いっぱい、一度に作付けした上、結果的に、収穫の時期も同じ頃の作物を多く植えてしまっていたため、今回のように収穫量が一時期に集中してしまった。しかし、食べきれない分については、知り合いや近所におすそ分けするという

のも、こうした「遊び仕事」「遊び」としての農の楽しみである。おすそ分け以外にも、利用者間で、それぞれが収穫した作物を交換する姿も見受けられる。こうした営みを通じて、多品種を楽しむ「遊び仕事」「遊び」としての農の長所を更に高めることができる上、利用者間の自主的な交流が促されることにもなる。

一方で、より自家消費のペースに合わせて、少しずつ収穫していけるような栽培がしたいという欲も出てきた。U氏に相談すると、「同じ作物でも、日をずらして植えることで、成長のスピードを段階的にすることができるので、来るたびに少しずつ

⁵⁸ 2011年9月18日 大宮農園の管理人 U氏への聞き取りより。



写真 25 収穫した大根

撮影：著者

つ収穫できるようになりますよ。」⁵⁹とのアドバイスがあり、次のシーズンにはそれを意識した作付けをしたいと考えている。

11 月も中旬～下旬になると、残っていた宮重大根や紫キャベツ、白菜も収穫の時期を迎えた。イチゴは冬を越させることにし、それ以外の作物については、これで一通りの収穫を完了したことになる。土の保水力や有機肥料など、大いに自然の力を借りながらも、最初のシーズンとしては思ったよりも順調に栽培活動を行えたのではないかとというのが著者の実感であった。しかし、この後、冬を迎えると、自らの農に対する未熟さを思い知らされることになる。土の栄養が足りなかったためか、あるいは寒さに耐えられなかったためか、11 月に追加で植えた作物が、小さな芽を

出したところで成長が止まり、年が変わっても状況に改善が見られなかったのである。



写真 26 「天地返し」で土を消毒する。

撮影：著者

6.4. 休閑期に何を求心力にできるか

1 月中旬になると、それらの栽培は諦め、管理人との相談の上で、春のシーズンに向けた土づくりを行うことに決めた。5.1.でも触れた「天地返し」と呼ばれる土づくりは、土の表層と深層とを入れ替えて休閑期に一月ほど天日にさらすことで、消毒を行い、害虫や病原菌を死滅させる効果を持つ。この天地返しを終えた後、2 月の末頃から、前のシーズンの反省を踏まえつつ、計画的に春の作付けに取り掛かっていきたいと考えている。

しかし、冬前の作付けに成功している利用者にしても、冬場はできることが限られるため、農園への足が遠のくことも事実である。マイファームで営まれているのが、有機農法における栽培活動と考えれば、それは作物の都合に合わせて手入れ



写真 27 冬は利用者の足が遠のく。

撮影：著者

をする農であるから、季節間で利用者の農園へのコミットメントの差異が生じるのは当然であるとも考えられる。一方で、農園を、ただ野菜を育てて収穫する場と捉えるのではな

⁵⁹ 2012 年 1 月 14 日 大宮農園の管理人 U 氏への聞き取りより。

く、利用者、オーナー、管理人、周辺住民や周辺農家が関係を築く社会関係資本⁶⁰づくりの場として捉えると、休閑期にも農地に人が集まるような仕掛けが必要になるかもしれない。浦和農園の管理人である O 氏も、冬場の対策の一つとして次のようなことを検討している。マイファームでは、基本的な農具は農園に備え付けられているため、基本的には手ぶらで通えるのが特徴であるが、「皆さん、備え付けのもの以外で使われる農具は、大体ホームセンターとかで買ってくるんですけど、例えば、作れるものはみんなで一緒に作っちゃうっていうこともできないかなあと考えていたりするんです。講習会のような形で。」⁶¹ 作物そのものに手がかからない季節は、O 氏のアイデアのように、農具の製作や手入れをしたり、利用者と周辺地域の住民との交流の機会づくりをしたりするなど、農そのものに閉じない、農の周辺の営みを発展させていくことも、今後の管理人の重要な役割になっていくかもしれない。

⁶⁰ 人と人とのつながりや関係性を、社会にメリットをもたらす資本として捉える考え方。ソーシャル・キャピタル。

⁶¹ 2012 年 1 月 8 日 浦和農園の管理人 O 氏への聞き取りより。

7. 都市住民による自由な農

7.1. 続かなかった過去の経験

大宮農園の利用者である M 氏は、20 年以上前に 1 年ほど、別の市民農園を利用していた時期があった。当時農園を始めた動機は、アトピーだった子供に、自分で安全な物を作って与えたいと考えたことと、子供の食育、土をいじる楽しさを生活に取り入れたかったことだったという。利用していたのは市が運営していた市民農園で、月額利用料 200 円程度、広さは 12 m²程度であった。区画を割り当てられただけで、指導者はいなかったため、M 氏は、幼い頃に兼業農家の祖父母の手伝いを多少していたことを手掛かりに、新たに本で独学しつつ、手探りで農を始めたという。週に 1~2 回、夫の H 氏を車の運転手にし、10 歳、7 歳の娘と、3 歳の息子を連れて、車で約 10 分の農園に通う生活が始まった。キュウリ、オクラ、ミニトマト、モロヘイヤ、ツルムラサキ、ピーマン等に挑戦し、上手くできるものもあれば、成長しすぎて巨大化してしまったものや、病気になって結局食べられずに終わってしまったものもあったそうだ。収穫が上手くできたときには、同じマンションの住民に配って、とても喜ばれ、充実感があったが、M 氏の感覚では、決して上手く栽培ができていたという実感はなかったという。特に難しさを感じたのは、「本で得られる知識だけだと、植えるものの選定とか、肥料の加減、収穫の時期なんかが、いざ、農園の状況に合わせてってことになる、そこで判断できないのよね。」⁶²ということだ。また、もう一つの問題は、夫である H 氏の非協力的な態度であった。H 氏は、微塵も農園に興味を示さず、車を運転して農園に着くと、妻の M 氏と子供達を下ろして、自分は一步も車外に出ず、家族が作業を終えるまで、運転席で終始新聞を読み耽って時間を潰していたという。H 氏に当時の思いを尋ねると、「生まれてから一切やったことがなく、興味が全く湧かなかった」「土に触るのが面倒くさかった」「かがみたくなかった」⁶³等、農に対する無関心と否定的な感情しかなかったことが伺えた。したがって、M 氏は、農業素人として、手探りの農作業をしつつ、幼い子供達 3 人の面倒も見ることが必要あり、次第に疲弊していったという。もともと子供達のために始めた農園で、キュウリを収穫した時に彼らが非常に満足そうな表情を見せるなど、手ごたえがなかった訳ではなかった。しかし、子供達は、大抵は農園を走り回って遊んでいるため、実質的な農作業の戦力にはならず、むしろ道路に飛び出さないようにと、安全面で気を遣うことに M 氏はエネルギーを消費してしまった。また、重い農具や肥料を、毎回車に積んで自宅と農園を往復するのも負担になっていった。3 月からの 1 年契約で利用を開始したが、その年の秋に一通り収穫を終えると、その後はほとんど農園に行かなくなってしまった。翌年の 3 月には、更新の契約はせず、市民農園の利用は結局 1

⁶² 2011 年 10 月 20 日 大宮農園の利用者 M 氏への聞き取りより。

⁶³ 2011 年 10 月 20 日 大宮農園の利用者 H 氏への聞き取りより。

年で終わってしまった。興味深いのは、やめてしまった一番の理由として M 氏が挙げたことが、これまでに触れたような、独学による農作業の難しさではなく、それと子供達の面倒を見ることの両立ができなかったことでもなく、「孤独」⁶⁴を感じたことであったという点である。M 氏は一人で利用していた訳でなく、3 人の子供達と一緒に、送り迎えだけの役割ではあるが、夫も同行していたのであるから、この「孤独」という回答は著者にとって意外なものであった。M 氏は、その「孤独」の意味について、「(農園に) 行っても他の利用者に会うことはほとんどなかったし、そうすると、本当に淡々と農作業をして、はい、今日はこれで終わりっていう感じになっちゃうのよ。」⁶⁵と説明する。M 氏にとって、夫も、子供達も、農を共に営むパートナーとはなりえなかった状況の中で、農園で、知識の薄い農についてコミュニケーションを取れる相手がいなかったことが、続けられなかった主要因であったものと推測される。

7.2. 農へのかかわりを強めていった背景

過去の市民農園の利用から 20 年以上の月日を経て、3 人の子供達は既に自立し、M 氏・H 氏夫妻は還暦を目前に控えている。生活が落ち着き始めた中で、M 氏は、再び農のある生活への憧れを抱き始めていた。そんな時に、管理人がいるマイファームの存在を知り、「自由に、自分のペースでやりながら指導してもらえるのなら、前の時と違っていいかなと思ったの。」⁶⁶と考えた。すぐに自宅に最も近い大宮農園へ見学に行ってみると、管理人の U 氏の人柄の良さが印象的だったという。仕事一辺倒で生活してきた H 氏も、このところは時間的にゆとりのある生活になっており、M 氏は、再び「運転手」の役割を与えて H 氏を農園へ連れて行った。ところが、H 氏は相変わらず農に対する興味は微塵も持ち合わせていなかった。U 氏の指導のもと、除草から耕起...と初回の作業が始まると、M 氏は意識的に各作業に H 氏を関わらせるようにした。H 氏は一つの作業が終わると、すぐに車の辺りに戻って煙草を吸い始めたというが、それでも M 氏は根気よく H 氏を呼び戻し、畝作り、植え付け、水遣りと、初日の作業を完遂させた。H 氏は、終始億劫な様子で作業に取り組んでいたという。

M 氏は車の運転はできるのだが、「農園までの道が覚えられない」⁶⁷ことを理由に、H 氏を運転手として毎回農園に同行させていった。しぶしぶ付き合っていた H 氏であったが、一週、二週と経過するにつれて面白いことが起きてきた。まず、作付けの翌週末に農園を訪れると、早くもいくつかの野菜が芽を出していた。それを見た H 氏は、「おお～、あれはおれが植えたやつだぞ。もう顔を出してきたんだな。早いな～」と興奮しきった様子だった。

⁶⁴ 2012 年 1 月 10 日 大宮農園の利用者 M 氏への聞き取りより。

⁶⁵ 2012 年 1 月 10 日 大宮農園の利用者 M 氏への聞き取りより。

⁶⁶ 2011 年 10 月 20 日 大宮農園の利用者 M 氏への聞き取りより。

⁶⁷ 2011 年 10 月 20 日 大宮農園の利用者 M 氏への聞き取りより。実際には、カーナビを使えば容易に辿り着けるという。

たという。⁶⁸M氏の計らいで、ほとんど全ての作物の作付けにH氏は関与していた。畝のどこに何を埋めたか、半分以上は記憶になかったようだが、芽を出していたものについて、一つひとつ、何の作物であるか熱心にM氏に確認を取り始めたという。驚くべきことに、その翌週からは、M氏が促す前に、H氏から率先して「今日は農園に行かなくていいのか？」と誘ってくるようになった。⁶⁹自分が関わった野菜が、行く度に明らかな成長を見せることが楽しみになっていった様子で、それが農園に通う動機になっていたのではないかとM氏は分析する。大宮農園のすぐ近くに、H氏の「唯一の趣味」とされる源泉かけ流しの温泉があったことも功を奏した。農作業で汗を流した帰りに、温泉に寄ることが楽しみになったようである。何度か通ううちに、収穫できるものもでてきた。M氏によれば、この、とれたものを「食べる」という行為が、H氏の農園へのコミットメントをより確かなものにしたという。「今日は何が食べられるかな」という言葉が、農園に行く前のH氏の口癖となり、最初の「成長を見る」楽しさから、「食べる」楽しさが、より強い求心力になっていったのではないかと考えられる。やがてH氏は、M氏が農園に行けない日であっても、一人で農園へ行くようになったという。大型の台風が農園を襲った後や、雨が降らない日が長く続いた時期には、心配をして農園へ駆けつけた。「日照りが続いていたときに、水をやりに行ったら、次の日に大雨が降ったけどね。」⁷⁰とH氏は大笑いしながら語った。

秋の収穫を終え、H氏を農園に誘引していた「成長を見る」楽しさと「食べる」楽しさの両方がなくなってしまい、H氏は「今は食べられるもんがなくなっちゃったなあ」⁷¹と、少し寂しそうにしているが、次の春に何を育てるか、夫婦で話して今から楽しみにしているという。

7.3. 意図と個性が映し出される区画利用

安室（2008）が、江戸時代における農家の自家消費用の前栽畑⁷²、そして現代の市民農園に共通する特徴として、多品種・少量生産の農が営まれていることを指摘しているが、マイファームにおける農も、それらと近い特性を持っていると考えられる。利用者が農作物を選定する上で何を基準にしているかを聞いて回ると、「好きなもの」「食べたいもの」「季節に合ったもの」「料理で使いやすいもの」「スーパーでなかなか買えないもの」「買うと高いもの」⁷³といった回答が多く寄せられた。一方で、下図のように、ある目的のもとで、利用区画すべてを使って単一種の栽培に励む利用者が居たり、バケツを用いて一善にもなら

⁶⁸ 2012年1月10日 大宮農園の利用者 M氏への聞き取りより。

⁶⁹ 2012年1月10日 大宮農園の利用者 M氏への聞き取りより。

⁷⁰ 2012年1月10日 大宮農園の利用者 T氏への聞き取りより。

⁷¹ 2012年1月10日 大宮農園の利用者 T氏への聞き取りより。

⁷² 前栽畑とは、江戸時代の農家が自家消費用に使用していた畑である。

⁷³ 2011年11月6日の浦和農園でのイモ掘り大会、パーベキューの開催日に、集まった利用者へ聞いて回った。

ない稲やメダカを育てたりする利用者もいる。



写真 28 マイファームで営まれる農は、多品種・少量生産が基本となっている。

撮影：著者



写真 29 子供の関与を高める目的で、すべてサツマイモで利用されている L 氏の区画。「子供と一緒に管理しやすいし、収穫の時の達成感が魅力ですね。」と話す。 撮影：著者



写真 30 市販で買うと値の張るサトイモのみを栽培する K 氏。「おすそ分けしたときに一番喜ばれるっていうのもありますね。」と話す。

撮影：著者



写真 31 区画内でバケツを用いて稲を育てる利用者。収量はさほど見込めないため、「遊び」としての意味合いが強いと考えられる。

撮影：著者

7.4. 共同区画や収穫祭が持つ意味

マイファームのすべてに存在する訳ではないが、農園によっては管理人と利用者が協力して栽培活動を行う「共同区画」が存在する。大宮農園と浦和農園では、どちらにも共同区画があり、ここでは管理人が利用者との相談のもと、何を栽培するかを決め、日にちを指定して、作付けと収穫をイベント的に行う。2011 年は、両農園とも、6 月にサツマイモ

を作付けし、11月に収穫イベントを行った。こうしたイベントは、普段顔を合わせることの少ない利用者同士の交流の機会として、また、土地オーナーが利用者と交流する機会としても重要な役割を果たしている。大宮農園のオーナーは、もともと農家ではないが、マイファームとして開園してから、自分の農園で1区画を利用して農を営んでおり、イベント時には利用者との交流を楽しむ。浦和農園のオーナーであるS氏は、4.4.で既述したように、こうしたイモ掘りイベント等と日を合わせて、自宅を開放してバーベキューを開催し、管理人や利用者との関係を深めている。

大宮農園で11月初旬に行われたイモ掘り大会には、7組の利用者が参加した。三世代で参加したD氏一家の中で、一際元気の良い4才の女の子Lちゃんは、大人に混ざって一人で何本ものサツマイモを収穫していた。共同区画からとれたサツマイモは、全部で70個にも上り、参加した利用者で分けても食べきれないほどの豊作だった。収穫を終えてサツマイモを数箇所に集め、利用者がお互いの労をねぎらっていると、Lちゃんが、「全部Lのだよ」と言って、利用者たちを笑わせた。しかし、とても自分や家族が食べきれない量であることを認識したのか、しばらくすると、各利用者のもとを順番に回って、「これ、あげるね」といってサツマイモを順番に配っていった。一度自分で所有するというプロセスを経た後、分かち合うことに意味を見出し、行動に出たのだろうか。Lちゃんの父親であるD氏は、「普段、うちの子は、じーちゃんばーちゃんや、親以外の大人と付き合う機会はあまり多くないですからね。だからこういう機会は結構貴重ですよ。」⁷⁴と話していた。

マイファームでは、共同区画で収穫した作物を東日本大震災の被災地へ送る「send-ai プロジェクト」⁷⁵を行っており、この日収穫されたサツマイモも、利用者が必要な分を取った残りは、仙台へ送られた。大宮農園の共同区画では、サツマイモの収穫後には白菜が植えられ、利用者たちは年明けに収穫ができるのを楽しみにしていた。



写真 32 イモ掘りでは、密生する蔦を協力して傾けてからカマで刈り取り、土を露出させてからイモを掘り出していく。 撮影：著者



写真 33 収穫されたサツマイモの一部
撮影：著者

⁷⁴ 2011年10月30日 大宮農園の利用者 D氏への聞き取りより。

⁷⁵ 「send-ai プロジェクト」とは、空き区画や共同区画で、管理人と利用者が共同栽培したものを東日本大震災の被災地へ送るプロジェクトである。

7.5. 区画を超えた管理の意識

5.3.で登場した大宮農園の習熟した利用者である A 氏は、農園の立ち上げ時からの利用者であり、農を始めてから間もなく 3 年を迎えようとしている。現在、大宮農園で 3 区画を利用しているが、それでも満足できなくなったのか、マイファーム以外の農園も利用し始めているという。A 氏の場合は、食べることも、育てることそのものが目的となっている様子であるが、農園を訪れると、こなれた手つきで淡々と作業をし、ほんの十数分程度で農園を後にすることが多い。ある週末、著者が区画で作業をしていると、A 氏が農園に現れ、自らの 3 区画の手入れを始めた。しばらくして A 氏が区画の作業を終えると、彼は自分の 3 区画以外の隣接する 2 区画で作業を始めたことから、著者は少し驚いて作業を中断し、その様子を眺めていた。A 氏が作業を始めた区画は、著者が大宮農園で利用を始めるときに、候補として管理人から提示された 2 区画であり、その時点でも利用者がいない空き区画であった。なぜ、空き区画で作業をしているのか。著者が近づいて話しかけると、A 氏はこう返した。「ここの空き区画 2 つでは、枝豆を育てているんですよ。次の利用者さんが決まるまでの間、ちょっと手入れでもしとこうかなと思って。枝豆をやっていると土も良い状態に保てるから、だから枝豆なんだけど。僕は別にこんなに枝豆を食べたいという訳でもないし、特に食べたくて作っているんじゃないんだけどね。家に大量に持って帰っても、家族も困っちゃうしね。良かったら、好きなだけ持って行ってください。」⁷⁶著者は、枝ごと何本かもらい受け、その場で食べられそうな豆を選別して持ち帰った。

A 氏の行いは、厳密な契約上の規定で考えれば、それに外れたものとも捉えられるが、決して私利のために行っているという印象は受けなかった。むしろ、3 年近くのマифームの利用を通じて、農園に対しての意識の変化が生じているのではないかと考えると、非常に興味深い出来事であった。A 氏は、利用者が集うイベントには参加しないし、淡々としていて、農園に他の利用者が居るときにも、積極的にコミュニケーションを取ろうとする姿勢はあまり見受けられない。しかし、上の A 氏の発言は、自らの私的な区画利用を超えて、3 年近く通い続けてきた農園、あるいは今後農園を利用することになる新規利用者に対する配慮が感じ取れるものであった。

⁷⁶ 2011 年 9 月 18 日 大宮農園の利用者 A 氏への聞き取りより。

8. 考察

8.1. 「都市農地」の保全の在り方をどう考えるか

事例における細部の記述が続いたため、一度俯瞰する視点に戻りたい。従来型の市民農園、そして農的活動・体験型市民農園と、都市住民が都市農地にかかわる在り方が多様化してきた中で、著者は、本稿で事例として取り上げたマイファームが、必ずしも真新しい農地の利用方法を実現しているという認識を持っている訳ではない。むしろ、農的活動・体験型市民農園といった、ここ数年から十数年で確立されてきた先例の特徴を受け継いだ、それらの延長線上にあるものとして捉えている。そもそも、体験型市民農園（農業体験農園）は、東京都練馬区の農家の発想で生まれたもので、その発祥の地から、「練馬方式」と呼ばれることもある。⁷⁷発案者である地元の農家の加藤義松氏は、「市民農園は消費者が勝手に野菜を作っているため、上手な人もいれば下手な人もいる。野菜だか雑草だかわからないものを作っている人もいる。」⁷⁸と考へ、プロの農家の計画と指導のもと、都市住民が主体となる農地利用の在り方が、これからの都市農業の在り方になると確信した。練馬方式では、農業素人である利用者に対し、きちんとした農業を営んで欲しいとの思いから、「必要最小限の農薬や化学肥料を利用している。また、生産する作物は全て園主の方で決定し、参加者は決められた作付計画に従って農作業をしている」⁷⁹という方針を取っている。著者は1.5.でこれを、「農家ありきの農」と称した。練馬方式とマイファームとの明らかな違いは、農薬や化学肥料の使用の有無と、作付け計画の主体が農家であるか利用者であるか、ということになろう。しかし、都市住民が営む農として、どちらがより適切かということの本稿で言及する意図はないし、著者にそれを判断する眼識もない。練馬方式の事例を用いた目的は、もう一人の発案者である白石氏の次の発言に触れるためである。「練馬区で推進している体験農園のノウハウをさらに蓄積して、その運営のコツをマニュアル化して普及することができれば、体験農園を全国の農村に広げることができます」⁸⁰「体験農園のネットワークを全国に広げるのが私の夢です」⁸¹白石氏の思いは、マイファーム代表である西辻氏のビジョンと大枠で共通している。したがって、今後の都市農地保全の在り方として、体験型市民農園のような仕組みに注目し、それを普及させていくとすれば、仕組みの受け手であり、導入者となる、農地所有者が、どのような事情と思いを抱えているかが重要であり、それに接近したことが、本研究の一つの役割になり得ると考える。

⁷⁷ 大江靖雄, 2009「体験型市民農園にみる都市農地利用と市民参加 ー新しい農村地域資源管理に向けてー」『食と緑の科学』63, 10ページを参照。

⁷⁸ 門間敏幸, 2005「体験農園への挑戦」『食農と環境』2, 91ページより引用

⁷⁹ 門間敏幸, 2005「体験農園への挑戦」『食農と環境』2, 91-92ページより引用

⁸⁰ 門間敏幸, 2005「体験農園への挑戦」『食農と環境』2, 92ページより引用

⁸¹ 門間敏幸, 2005「体験農園への挑戦」『食農と環境』2, 92ページより引用

土地所有者である農家の観点で、今回の調査が付け加えられることがあるとすれば、まずは、「意思とは無関係に、受け継いだもの」としての農地であっても、それでもやはり、守っていかなければならないという農家の思いが存在することである。浦和農園オーナーの S 氏は、農家の後継ぎとして生まれながら、その決められた生き方を素直に受け入れられた訳ではなかった。しかし、自らが営農できない状況となっても、約 300 年、16 代守られてきた農地を、農地として守っていきたいという思いを堅持していたのである。その背景には、農地と S 氏の意識とを結びつける作用として、S 家の歴史という「時間的な作用」と、伝統ある周辺農家に迷惑をかけたくないという「空間的な作用」の 2 つが存在し、これらが S 氏の意思を形成していたと考えられる。

一方で、腰を痛めた S 氏が、「選択肢のない状態」に迫いやられたことにも触れた。「選択肢のない状態」という表現を用いて S 氏が説明しようとしたのは、つまり、農地以外の用途に転用することが土地制度上の制約で容易ではなかったことと、同時に S 氏が営農を続け、自ら農地を保全していくことが困難であったこととで身動きが取れなかった状況である。自らが営農を続けることは困難でも、指導者として、周辺の都市住民を対象とした体験型市民農園のような形式で、農業経営を行うことはできたのではないかという疑問も生じるかもしれない。実際、著者も、そうした選択肢はありうるものと考えていた。しかし、聞き取りを進める中で明るみに出たのは、プロの農家であっても、都市住民の志向する農に対して指導者の役割を果たすことは、誰にでもできることではない、という現実であった。一般的に、少品種・多量生産の生業としての農に対し、都市住民が志向する多品種・少量生産の農は、大きく性質が異なり、個別的で多様な農園利用者の栽培活動に対応するためには、農作物に対する広範な知識が求められ、かつ生産性や効率性を重視するのではない、「遊び仕事」「遊び」としての農の在り方を理解する必要がある。例えば、浦和農園の管理人を務めた T 氏は、生業として多品種を扱っていた農家のもとで 4 年間の経験を積んでいたことで、農園の管理人としての仕事がやりやすかったと振り返っているが、T 氏自身、「多品種を扱う農家は限られるかもしれない」⁸²と話している。農家が農的活動や体験型市民農園を運営しようとするれば、契約や集金、集客といった業務をこなしつつ、都市住民の農に対するニーズに応えるだけの知識やノウハウを身に付ける必要があり、それができる農家は限られるであろう。農家が都市農地を農地のまま保全していくための一つの手段として、S 氏が選択したように、マイファームのような仲介者に運用を委ねられる環境を作っていくことの重要性は増していくと考えられる。また、農地の所有者が農家であるとも限らない。農家の子供が、土地は受け継いでも農業を継がなくなっていることや、「均分相続制」によって、非農家による農地の所有者が増えたことも考慮すると、農的活動・体験型市民農園のように、農地所有者が農家であることを前提とした仕組みは、非農家が所有する農地や遊休地には適用できず、その意味では限界がある。実際、今回事例とした大宮農園の所有者は非農家であった。非農家が所有する農地や遊休地にこそ、マイファーム

⁸² 2012 年 1 月 11 日 浦和農園の元・管理人 T 氏への聞き取りより。

ムのような仕組みが展開されていく意義が大きいであろう。

次に、周辺地域住民が、農地をどのような視点で評価しうるかについて改めて検討する。

5.4.で著者は、「遊び仕事」「遊び」としての農が、必ずしも農園への頻繁かつ長時間のコミットメントを要さず、比較的少ない頻度、短い滞在時間の中で営まれていることを指摘した。それでも、「遊び仕事」「遊び」としての農は成立するし、より多くの都市住民が、現代的な生活を送りながら農に携わるためには、むしろこのような農園へのかかわり方を積極的に認めていくことも求められよう。しかし、都市農地を、農園としての姿で、地域の中で持続的に存続させていこうとすれば、地域住民や周辺農家から、農園の利用について理解を得る努力も同時に必要となる。本研究が対象とした大宮農園では、不定期に訪れる利用者に代わり、管理人が定期で農園を管理、巡回する中で、隣接する施設の利用者や、周辺農家、地域住民と交流し、関係を築いている姿が見受けられた。コモンズ論を展開する井上（2004）は、共有地における発言権の差は、その地へのかかわりの深さによって認めようとする「かかわり主義」を提唱している。都市農地は所有物であり、そこにアクセスできる利用主体にも制約があるため、コモンズにはなりえないが、S氏がその在り方について周囲の家々に配慮したように、地域における共有資産としての側面も認められる。1.2.で取り上げた菊地（1999）の調査でも、地域住民は、緑地機能としての都市農地の役割を重視していることが示されており、この景観的意味合いや、食糧供給、防災といった農地の持つ機能に着目すれば、都市農地が私的所有物でありながら、同時に公共性を併せ持った地域の共有資産であることが理解できる。そこで、農地に「かかわり主義」の論理を適用してみると、農地が地域の中でどう評価されるかは、いかに利用・管理の主体が農地にかかわり続けているか、という視座で分析することができるかもしれない。マイファームにおいて、管理人が農園にいる、農園にかかわり続けている、ということそのものが、都市農地の保全、つまりは都市農地を農地として残していくことに対し、オーナー、利用者、周辺住民や周辺農家などの関係者の間で、重要な意味を果たしているものと著者は考える。管理人がいることで、素人として農を始める利用者が、必要なときに相談することができ、各区画の状態も把握される。また、利用者の足が遠く季節であっても、オーナーとの信頼関係を途切れさせてしまうことを防いでいる。さらに、周辺住民や周辺農家からも、管理人が農園の顔として認識されることで、利用・管理の責任の所在が明らかとなり、農園が地域においてその存在を認められることに繋がるものと考えられる。

8.2. 「遊び仕事」「遊び」としての農の成立条件と、自己強化の特性

本研究の目的に立ち返れば、それは、「農家ありきの農」ではない、都市住民の自由な意思のもとに営まれる「遊び仕事」「遊び」としての農が、地権者である農家や周辺の地域住民に許容されうるか、というものであった。ここで確認しておく必要があるのは、著者が

「農家ありきの農」と呼んだ、農的活動や体験型市民農園で営まれている都市住民による農は、「遊び仕事」「遊び」の農ではないのか、ということである。農的活動・体験型市民農園で営まれている農も、経済性の強い生業としての農業ではなく、遊びの要素が強い農であり、その意味では、「遊び仕事」「遊び」としての農であると理解して良いと考えられる。農的活動・体験型市民農園とマイファームとを相対化して、どちらが遊びで、どちらがそうでない、といった議論を展開する意図はないし、それが重要であるとも思わない。ただ、マイファームでは、7.3.で見たように、区画ごとに利用者の個性的な作付けが行われており、これは農家が作付け計画を取り決め、一斉に同じ農作物を作る農的活動・体験型市民農園ではあまり見られない光景であろう。したがって、マイファームで営まれる農は、これまでそう呼んできたように、都市住民の自由な意思に基づく「遊び仕事」「遊び」としての農として、改めて定義したい。前項で既述したように、農薬の使用の有無を含め、どちらがより適切な農であるかを本稿で論じる意図はない。「練馬方式」のような指導の仕方の方が、より習熟した農を体得できる可能性があるし、無農薬栽培で頻繁なコミットメントをしないマイファームでは、管理人や利用者による管理が不十分な場合には、雑草や害虫が周囲に影響を与える懸念もあるだろう。「遊び仕事」「遊び」としての農のどのような在り方が、何に対してより適切であるかという議論が、今後活発化していくことが望まれる。

本研究では、マイファームが従来型の市民農園とは異なり、農家が所有する農地を直接利用する責任を利用者が負っており、一方で、自由な意思に基づく「遊び仕事」「遊び」としての農が、それを担いうるのか、という問いを立てた。また、そうした農地の利用がオーナーや周辺住民に許容され、持続的な農地管理がなされていくとすれば、各主体間の関係性の中にどのような要素が作用しているかを見たいと考えた。事例から見えたことは、まず、プロとして営農してきた農家であっても、「遊び仕事」「遊び」としての農、多品種・少量生産の農に対して、評価や指導の基準を必ずしも持ち得ないという現状である。まして、オーナーが非農家である場合には、評価のしようがない。そこで、オーナーの姿勢としては、区画利用の在り方について個別に注視するような態度は見られず、あくまで管理主体としてのマイファーム、実質的には管理人に一任しているように見受けられた。これは、オーナーと管理人との間で信頼関係が構築されていることで成立しているものと考えられる。

しかし、管理人ありきの農になってしまえば、体験型市民農園などの「農家ありきの農」として変わらないものになってしまう。都市住民による自由な意思に基づく「遊び仕事」「遊び」としての農を継続して営むためには、どのような環境が必要であるのか。大宮農園利用者である M 氏・H 氏夫妻への聞き取りでは、かつて従来型の市民農園を利用していた際に、それが続かなかったいくつかの要因が示された。農業素人が独学のみで農を営む難しさ、子供達の面倒とそれを両立させる難しさ、そして、農具や肥料を毎回自宅から運搬する手間などが挙げられたが、最大の要因は、農園に行った際の「孤独」感であっ

た。この孤独な状況については、「遊び仕事」「遊び」としての農が営まれる市民農園やマイファームにおいて、各利用者の訪問頻度の少なさや滞在時間の短さといった特徴から、ある意味で構造的な必然性でそうならざるをえないともいえる。しかし、マイファームでは、管理人が居ることで、いつでも相談ができるというメリットがあるだけでなく、居ることそのものにより、会話が生まれ、利用者の孤独感が緩和されるという意味もあるのだろう。浦和農園の管理人である T 氏も、管理人として最も重要なのは、「コミュニケーション力」だと言っていた。こうした環境下では、管理人の面々も「自分で熱心に勉強しながら取り組んでいる人も多い」「感覚をつかんだ人はどんどん自主的に」と話すように、主体的かつ継続的に「遊び仕事」「遊び」としての農を営む利用者が増えていくのではないかと。

また、浦和農園の管理人である O 氏が、「やっている中で、夢中になっていく人が多い」と指摘していることや、全く農に対する興味を持ち得なかった大宮農園利用者の H 氏が、率先して農園に行くようになったことを鑑みると、「遊び仕事」「遊び」としての農には、ある意味で、自己強化的な作用が内在しているように思われてならない。農へのコミットメントは、耕起や作付けなどを通じて自らが最初に農地に働きかけたことを始めとして、「成長を見る」楽しさでまず強化され、「食べる」楽しさでさらに強化されるという作用、すなわち自己強化の作用を持つのではないかと。いかなる形態であれ、農に携わるという事は、一定期間以上の、人と自然との継続的な関係性を前提としていることに気づく。これは、著者の参与観察を通じた実感でもあるが、耕起、作付けを行った日から、その主体には、自然へ働きかけたことによる責任や思い入れが生じていると考える。H 氏は、M 氏によって半ば強引に初日の作業に関与させられたが、その一つひとつの作業への関与、かわりが、少なくとも「収穫」という結実までの期間、H 氏が自然との関係性を維持続けたことに寄与したことは事実であろう。著者は、若葉が害虫に喰われそうになっている状況を目の当たりにし、コミットメントの意識を高めたが、そういう意味では、農薬を使わない有機農法のように、多少手間がかかる方が、「遊び仕事」「遊び」としての農を盛り上げるようにも思う。また、マイファームでは、利用者が画一的に同じ作物を作るのではなく、それぞれの意思で自由な作付けが行われているが、それによって、利用者間でのおすそ分け、交換といった行為が特徴的に見受けられる。こうした自然を前にした人と人との間で行われる行為が、多品種を楽しむ「遊び仕事」「遊び」の農の特性を一層強め、農地を媒介とした社会関係資本づくりにも寄与するものと考えられる。

8.3. 都市農地の「所有」と「利用」を組み替えるという視座

所有者が、同時に利用者であることを当然として、これまでの都市農地の利用・管理はなされてきた。その背景には、食糧供給機能を担う農地は、生業としての農業によって利用されるべきものであるという固定的な観念があり、農家自身も、自ら営農をし続けられ

るのか、それとも不動産経営に切り替えざるを得ないのか、といった二者択一の選択を迫られてきた。結果として、農地がその在り方を維持することは難しくなり、転用ができない場合は休耕地や耕作放棄地となり、転用、売却ができる場合は、農地としてではない、全く異なる利用がなされていった。しかし、都市農地が、食糧供給機能だけでなく、レクリエーション機能、防災機能、景観上の機能、といったように、これまでにない価値を地域住民から認められつつあることも事実である。それらの価値を享受するためにも、都市農地を開発するのではなく、農地として保全していくことが周辺住民から求められており、さらには、自らが農地の利用者になりたいという傾向が高まっている。⁸³

こうした都市農地をめぐる近年の動向を概観した上で、本研究では、都市住民が、農家への手伝いやサポート、ボランティアといったかかわりではなく、自らの意思と責任のもとで、他者が所有する農地を直接利用する主体となったときに、その「遊び仕事」「遊び」としての農が、持続的に農地を利用する在り方として地権者や周辺住民に認められうるか、ということを考察してきた。そこでまず見えてきたことは、従来型の市民農園のように、知識やスキルを伴う農を、農業素人である都市住民に自助努力で任せることには困難が伴い、持続的かつ適切な利用がなされないおそれがあるということである。都市住民の自由な意思に基づく「遊び仕事」「遊び」としての農は、指導者不在の状況では成り立ちにくく、かといって、指導者による綿密な計画ですべての手順を導くような状況でも成り立たない。事例が示したのは、利用者が主体的な農を営む過程において、必要な時に頼れる役割を果たす、管理人の絶妙な立ち位置であった。その役割とは、農についての知識やノウハウを与えることだけを意味するのではなく、農園に居ることそのものの意味も含んでいた。農地の所有と利用を組み替える試みは、管理人という触媒を介して、オーナー、利用者、周辺住民、周辺農家が農地にかかわり、あるいはその存在を認めることで、成立する可能性が伺えた。

農家が生業としての農業を営み続けてきた一方で、都市住民もまた、経済性の強い生業として現代的な労働に身を投じてきた。その都市住民が、経済性に集約された生活の在り方を見直し、無意識的にでも、精神性や身体性の伴う「遊び仕事」「遊び」としての営みに価値を見出し、それによる余暇の時間の過ごし方を志向していることは興味深い。また、特筆すべきは、農地の所有と利用を組み替えた時に、利用の主体が必ずしもオーナーから都市住民にすべて移行するというのではなく、農家・非農家を問わず、オーナー自身も利用主体の一人として「遊び仕事」「遊び」としての農を営んでいることである。浦和農園の管理人である S 氏は、自ら区画を利用し、生業として営農していたときには作らなかった作物に挑戦している。「遊び仕事」「遊び」としての農であれば、腰を痛めていても、楽しみながら十分に続けていけるという。非農家である大宮農園のオーナーも、2 区画を利用して、管理人の指導のもと初心者として農を営んでいる。特に、これまで生業としての農業を営んできたプロの農家が、経済的・身体的な制約から従来の営農が続けられなくなっ

⁸³ 武部隆,1991「都市住民の農業・農地に対する評価と期待：高槻市民を例にとって」『農業計算学研究』23,65-78 ページを参照

たとして、農から切り離れた生活を余儀なくされるのではなく、「遊び仕事」「遊び」としての農へと性質を変容させることにより、持続的に農のある生活を送ることができる点は興味深い。マイファームは、オーナー、そして利用者が、ともに「遊び仕事」「遊び」としての農を営む場となっており、その意味では、「生業」「遊び仕事」「遊び」という連続スペクトルを捉える視座こそが、都市農地の所有と利用の組み替える視座と動態的に結びついていると理解することができるのではないだろうか。

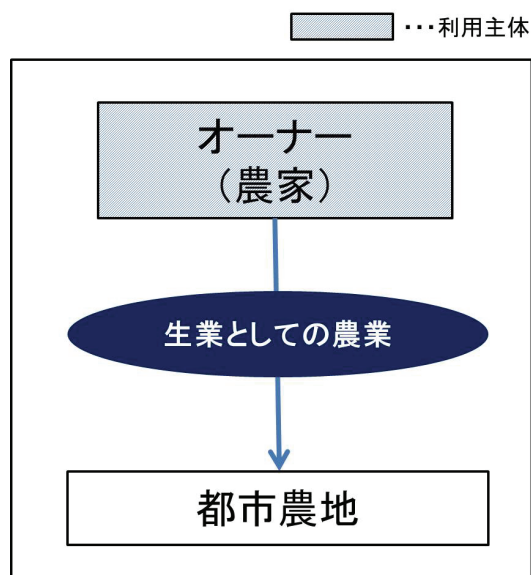


図2 「農地利用図 (所有と利用が同一主体による場合)」 作成：著者

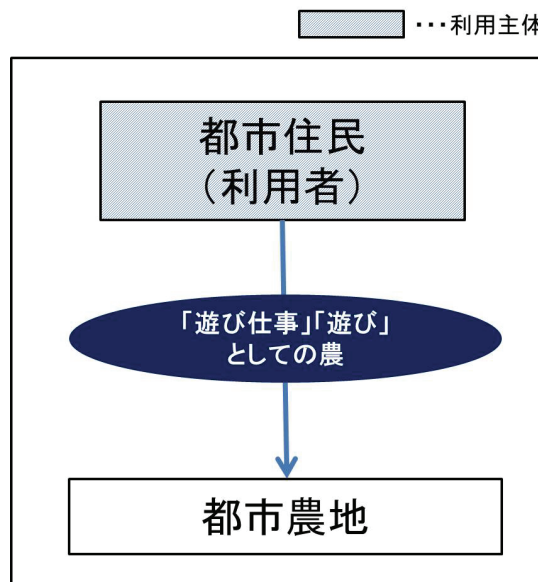


図3 「農地利用図 (従来型の市民農園の場合)」 作成：著者

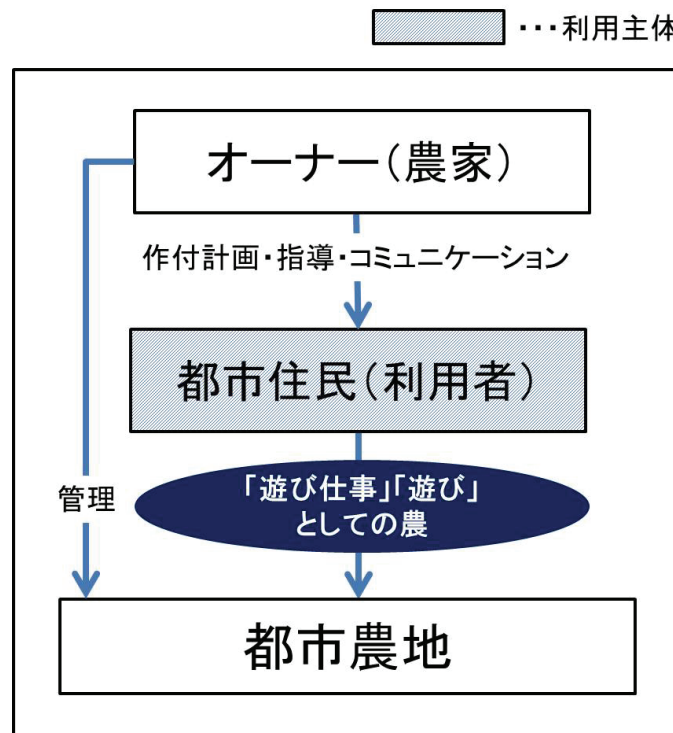


図4 「農地利用図（体験型市民農園の場合）」 作成：著者

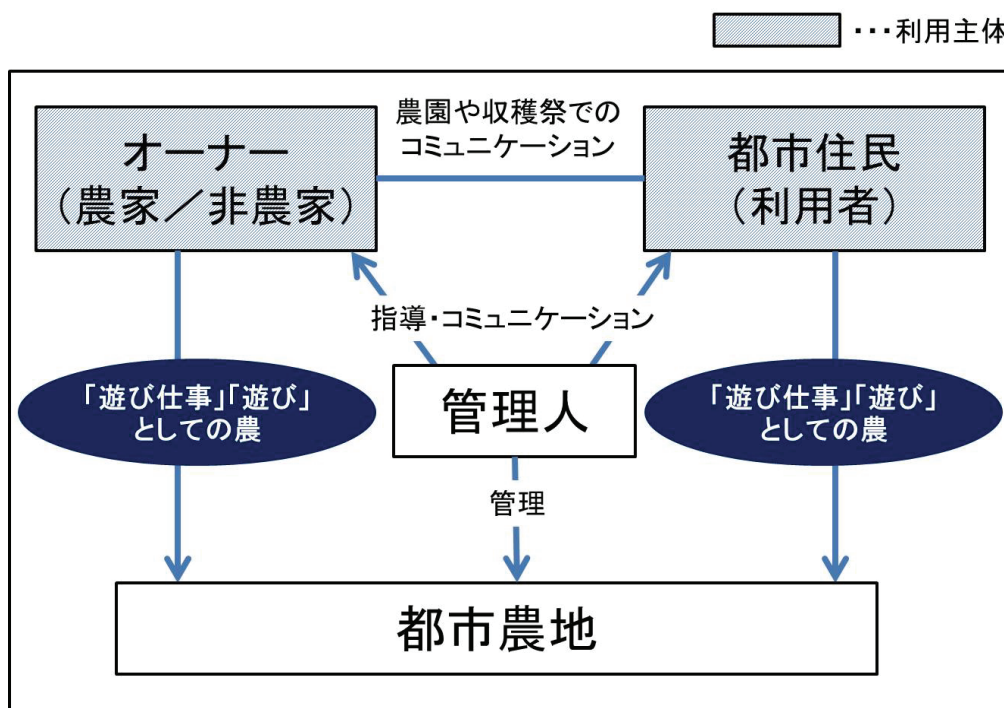


図5 「農地利用図（マイファームの場合）」 作成：著者

9. まとめ

本研究では、都市住民が日常の中でかかわりうる自然として、都市における農地に着目した。農地が里山や公園と大きく異なる点は、その私的所有物としての特性から、誰もがアクセスできる訳ではなく、利用者に制限がかかることである。しかし、農地が持つ公共的な機能から、それがオーナー、利用者に限らず、周辺住民や周辺農家にとっても保全していく意義が見出されることが理解できる。

都市においては、土地や住宅の私的所有化が促進される中で、人口が過密化し、より近代化し、自然は日常から遠ざかって行った。それによって、私たち都市住民は、市場を介した限定的な自然との関係性、すなわち「切り身」の関係性の中での暮らしを送ってきている。近代的な土地の所有化と、それに伴う所有者の排他的な土地利用が、結果として自然との関係性を希薄にしてきたとするならば、土地の所有と利用の組み替えを検討することで、自然との「生身」の関係性を回復していくという発想があっても良いだろう。

都市農地の保全が困難な状況に陥ったとしても、それを直ちに公有化して、地域社会で管理していくということは難しい。公有化したからといって、それが地域住民の望む在り方で、適切に管理されていくとも限らない。農地には、代々受け継がれてきたことによってもたらされる作用（時間的な作用）と、周辺地域との関係性によってもたらされる作用（空間的な作用）とが働いていることを観察し、農地を所有しているという状態を、「今」や「家」といった定点観測的かつ静的な視点では評価ができないことを理解した。もちろん、都市農家ごとの事情や考えは別個に存在することには十分留意する必要があるが、少なくとも S 氏にとっては、農地は「それでも守らなければならない」ものであった。私的所有されていながらも地域の共有資産としての機能を併せ持つ、ある意味でいびつな構造の中に存在する都市農地を、今後誰が利用し、保全していくのか。

今回の調査では、都市住民の農を「指導できない」というプロの農家の事情を垣間見た。そこには、生業としての農業と、「遊び仕事」「遊び」としての農の性質の違いという、構造的な問題が内在していることを分析した。さらに、農地や遊休地の地権者が農家であるとは限らず、若者の農業離れや均分相続の問題で、非農家が農地や遊休地を所有している場合も多いため、農家が所有者であることを前提とした体験型市民農園のような仕組みだけでは、今後の都市農地の保全の施策としては不十分といわざるを得ない。

都市住民による「遊び仕事」「遊び」としての農が、地権者や周辺住民に認められるか、というのが本研究の問いであったが、調査の結果見えてきたことは、プロの農家であっても、都市住民の個別的な農を評価することは難しく、それを管理人に一任している姿であった。前提として、地権者や周辺住民と管理人とが、十分な信頼関係で結ばれていることが必要であり、管理人が、利用者とオーナー、地域と農園とをつなぐ触媒としての役割を担っていると考えられる。

個々のオーナーの自助努力に委ねるのではなく、利用者を支える管理人という仲介者が

農園の管理を担うモデルは導入がしやすいためか、東西のマイファーム農園数はわずか数年で合計 70 を超えるまでになっており、新しい農園が毎月 2-3 個のペースで新規開園している。マイファームは、地域住民の自由な意思に基づく「遊び仕事」「遊び」としての農が、日常の中で自然との「生身」の関係性を回復していく在り方を、今後多くの都市農地において、そして多くの都市住民に対して、実現しうる可能性を示している。

＜参考文献＞

- 安室知,2008「「遊び仕事」としての農・前栽畑と市民農園の類似性（特集 農業・農のエンタテインメント・デザインを考える）」『農業および園芸』 83(1), 127-132.
- 五十嵐敬喜,2004「都市と土地所有権」藤原良雄編『環』vol.17,藤原書店
- 井上真,2004『コモンズの思想を求めてーカリマンタンの森で考える』岩波書店
- 大江靖雄,2009「体験型市民農園にみる都市農地利用と市民参加ー新しい農村地域資源管理に向けてー」『食と緑の科学』 63, 9-17.
- 大沢正男,1985『土地所有の構図』早稲田大学出版部
- 大野秀敏,2008『シュリンキング・ニッポンー縮小する都市の未来戦略』鹿島出版会
- 大和田順子,2011「自然資源を活かしたビジネスの新機軸」『アグリ・コミュニティビジネスー農山村力×交流力でつむぐ幸せな社会』 26-33.
- 門間敏幸,2005「体験農園への挑戦」『食農と環境』 2,87-92.
- 菊地香,1999「首都圏および地方中核都市住民による市街化区域内農地利用の評価に関する研究ー松戸市小金地区と新潟市鳥屋野地区のアンケート調査結果を中心にー」『農林業問題研究』 134,44-52.
- 鬼頭秀一,1996『自然保護を問いなおすー環境倫理とネットワーク』ちくま新書
- 鬼頭秀一・福永真弓編,2009『環境倫理学』東京大学出版会
- 後藤光蔵,2000「都市農地の保全」『武蔵大学論集』 47(2),33-61.
- 佐古井貞行,2007「農園都市形成の意味と構造」『埼玉学園大学紀要(人間学部篇)』7,155-167.
- 阪口知子・大江靖雄,2003「都市農業としての体験農園の経営的可能性ー練馬区農業体験農園を事例としてー」『2003年度日本農業経済学会論文集』 108-113.
- 嶋津格,1992「所有権は何のためか」『現代所有論：法哲学年報』 1991,58-76.
- 白石好孝,2001『都会の百姓です。よろしく』コモンズ
- 武内和彦・鷺谷いずみ・恒川篤史編,2001『里山の環境学』東京大学出版会
- 武部隆,1991「都市住民の農業・農地に対する評価と期待：高槻市民を例にとって」『農業計算学研究』 23,65-78.
- 中原嘉嗣・星野敏,2006「都市農地の現状と課題についてー神戸市西区を事例として」『農村計画学会誌』 25,437-442.
- 並木亮,2008『都市住民を主体とした都市農地の利用価値と保全・活用に関する研究』博士論文（筑波大学）
- 並木亮・横張真・星勉・渡辺貴史・雨宮護,2006「市街化区域内農地における都市住民による農作物栽培の実態解明」『農村計画学会誌』 25,269-274.
- 農林水産省,2010「第3章 農村の活性化に向けた取組」『食料・農業・農村白書』
- 樋口めぐみ,1999,「日本における市民農園の存立基盤」『人文地理』 51(3),75-88.

平松研,2005「スローライフとコモンズ：新しい農村と農業の時代へ」『農業土木学会誌』
73(6),510-512.

丸山康司,2006『サルと人間の環境問題—ニホンザルをめぐる自然保護と獣害のはざまから』昭和堂

宮内泰介,2011『開発と生活戦略の民族誌—ソロモン諸島アノケロ村の自然・移住・紛争』
新曜社

カール・ポランニー,1975『大転換—市場社会の形成と崩壊』吉沢英成・野口建彦・長尾史
郎・杉村芳美訳,東洋経済新報社

謝辞

本研究を進めるに当たり、マイファーム関係者の皆様には大変お世話になりました。大宮農園、浦和農園のオーナー、管理人、利用者の皆様にご協力いただければ、この研究は成立しませんでした。特に、浦和農園のオーナーである S さん、管理人の O さん、T さん、U さんに、それぞれの半生についての記憶や思いを丁寧に語っていただけたことが、研究に行き詰まり、どう書き進めたら良いか見当がつかなくなってしまった私を、幾度となく立ち直らせて下さいました。厚く御礼申し上げます。

指導教官である鬼頭秀一教授には、まず私を研究室に迎え入れてくださったことに感謝いたします。今思えば、私が入学試験時に掲げていた問題意識や研究目的は、非常に偏った見識による稚拙なものでしたし、事前に研究室への見学もせず、先生との面談にも伺わずに受験をしたのですから、本来は落とされて当然の立場であったといえます。それでも、無知で非常識な私を広い心で受け入れて下さり、満 2 年の休学期間を挟み、計 4 年間に渡って根気強くご指導いただいたことには、感謝の言葉もございません。今となっては良い思い出ですが、おそらく学年の中で最も研究の進度が遅れていた私は、危機感から、先生の間人ドックの健診先のホテルにまでご指導を請いに伺い、ご迷惑をおかけしました。くれぐれも健康にはご注意ください。

副指導教官に就いていただいた大野秀敏先生との面談では、事例における仲介者としての管理人の重要性に気付かせていただきました。また、清水亮先生には、ご多用の中、論文提出の〆切数日前に面談の機会をいただき、私の研究におけるほとんどの言説に新たな価値が認められないこと、しかし同時に、その中で唯一つだけ活路があることを示して下さいました。お二人の先生に厚く御礼申し上げます。

研究室の博士課程に在籍される折戸えとなさんには、最も進度の遅い私の指導担当に就いていただき、もしかしたらハズレくじを引かれた気分だったかもしれません。しかし、最後の一か月半、集中的にご指導いただいたお蔭で、何とか書き上げることができました。同じく博士課程の李かりんさんにも夜遅くまで教室でアドバイスをいただき、清水研究室のイム・スジョンさんには良質な文献をご紹介いただきました。ありがとうございました。

研究室の同期で一緒に論文を書いた皆さんには、私の方が大分前に入学したにもかかわらず、研究について色々と教わる事が多く、大変お世話になりました。

仕事と研究の二足のわらじの生活を認め、大いにサポートして下さいました職場の皆様、特に、久野慎太郎室長と千葉誠さんがいらっしゃらなければ、この論文は到底書き上げられませんでした。ありがとうございました。

香港での仕事の合間に、遠隔地で目次や改行の調整を手伝ってくれた澁谷なほさん、ありがとうございました。

最後に、長い学生生活を支えてくれた父、母、二人の姉と、墮落した孫に、新潟から何度も電話でハッパをかけてくれた祖母に、深く感謝します。